

WORLD
TAIKO
CONF
RENCE



World Taiko Conference 2020

サーベイ・レポート

杉本浄 編著

小林史子／石野隆美／鍋倉咲希

門田岳久／小西公大

2021年2月28日

©World Taiko Conference Committee

主催:ワールド太鼓カンファレンス実行委員会

協力:公益財団法人日本太鼓財団

助成:文化庁／独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

協賛:株式会社浅野太鼓楽器店、株式会社宮本卯之助商店、篠笛 立平、ハウス食品グループ本社株式会社、ローランド株式会社、株式会社三浦太鼓店



令和2年度日本博
イノベーション型プロジェクト



食でつなぐ、人と笑顔を。



Roland

三浦太鼓店

執筆者:

杉本浄-東海大学准教授(歴史学)

小林史子-東京学芸大学大学院修士課程(教育学)

石野隆美-立教大学大学院博士課程(文化人類学)

鍋倉咲希-立教大学大学院博士課程(社会学)

門田岳久-立教大学准教授(文化人類学・民俗学)

小西公大-東京学芸大学准教授(社会人類学)

目次

はじめに	杉本浄	1
WTC 開催企画・行事一覧表		2
1. ライブ・トーク・セッションについて		
トピック1-舞台表現として太鼓 -その発展と未来- 多様な個性を表現する創作太鼓	小林史子	3
トピック2-太鼓と社会包摂 療育的見地からの太鼓の有効性 閉ざされた心体から開かれた心体へ	杉本浄	5
トピック3-グローバル: 多文化共生社会における太鼓の価値- 多様なままに響き合う太鼓コミュニティをめざして	石野隆美	7
トピック3-ローカル: 地域づくりと太鼓の価値- 「選択縁」とポリフォニックな太鼓の共同体	鍋倉咲希	9
ライブ・トーク・セッション企画へのコメント グローバル・ヴァナキュラーとしての和太鼓	門田岳久	11
<共>の世界としての太鼓が持つ可能性	小西公大	13
スペシャル・ライブ・トーク 太鼓を使った創作の原点と舞台芸術としての太鼓	杉本浄	15
2. アンケート調査の結果と分析について	杉本浄・小林史子	17
3. 全体の総括	杉本浄	24
参考文献一覧		25

はじめに

杉本 浄

日本で初めて開催される World Taiko Conference (以下 WTC と略記)は 2020 年 11 月 21 日 - 22 日の 2 日間にわたり開催された。新型コロナウイルス(Covid-19)の世界的な感染拡大を受けて、当初構想された規模をかなり縮小し、開会直前の関連行事の中止もあり、最終的にはすべてオンラインによる開催になった。

この「Taiko Conference」の先駆例は北米(1997 年開始)にあり、続いてヨーロッパ(2016 年開始)においても会を重ねてきた。こうしたカンファレンス形式の太鼓交流では、貸し切られた一つの会場の内に参加者が集い、講師によるワークショップや太鼓に関する講義が繰り広げられる。いわば、交流を兼ねた大人数の太鼓合宿といったところだろうか。その開催の背景には当該地域での太鼓グループが数多く誕生してきたことがあり、それに伴って演奏技術や指導、さらに関連する道具などの面で、情報交換が必要とされたことがあるだろう。今日まで継続して開催されてきたことからわかるよう、回を重ねていく中で交流そのものの楽しさもカンファレンスの重要な要素になっていったようである。こうしたカンファレンス形式は日本ではおよそ発想されなかったであろうが、今や太鼓を通じた交流の在り方の一形式であることは間違いない。

今日見られる組太鼓、創作太鼓とも称される太鼓を中心に置く演奏形態が日本ではじまっておよそ 50 年とも 70 年とも言われる¹。今回、その太鼓のムーブメントが最初に起こった日本で、ようやく「世界」を冠したカンファレンスが行われることになった。そのいきさつについてはここでは追わないが、こうした北米・ヨーロッパで形成されたカンファレンス形式を日本が輸入しなければならなかった状況に、すでに和太鼓の現在形が凝縮されているように思われる。

WTC の企画・行事の詳細については次ページの一覧表ないしホームページに譲るとして、ここで公開された映像の概略を示せば事前に段階的に公開された3つのテーマに沿ったプレミアム・トークの映像群、先駆的な役割を果たしてきた林英哲の映像、その林による WTC テーマ曲の映像、世界各地からの投稿を集めた「太鼓のハナシ」、自分たちの楽曲を共有するための映像群、さらに2本の期間限定のドキュメンタリー・フィルムの公開があった。残念ながら、共催行事であった太鼓のワークショップやコンサートは直前に中止が報じられ、全てキャンセルになった。

このサーベイ・レポートもまた当初計画から大きく変更を余儀なくされた。最初に、当日ライブ配信された3つのトピックの4つのライブ・トーク・セッションの内容をまとめ、それぞれにコメントをつけていく。これに加え、研究者2名にトーク・セッション全体についてコメントを寄せてもらった。続いて、WTC 期間中から 12 月 15 日まで実施したオンラインを介したアンケート調査の結果についてまとめてある。最後に、以上を踏まえた上で、全体の評価について述べる。

¹ 組太鼓や創作太鼓のはじまりをどの時点に置くかは議論の多いところである。およそ 50 年とするのは 1964 年の東京オリンピックが開催された際に、この形式の太鼓が披露され、多くの人々に認められたことを根拠に置く。およそ 70 年とする場合は、その形式が現れはじめた時を重視する。

WTC 開催企画・行事一覧

●WTC 期間前の企画・行事:

- ・林英哲の特別講演:太鼓の独奏者で、太鼓を舞台芸術の域まで広げる先駆者の話し
- ・WTC プレミアム・トーク:3つのトピックに国内外の太鼓界を代表する総勢 12 名の語り
- ・WTC のテーマ曲の発表:林英哲による誰もがたたけるテーマ曲の提供
- ・「太鼓のハナシ」動画投稿:世界各地の太鼓演奏者たちが自分たちの活動を紹介する企画。3つのトピックに分類された、84 本の動画が寄せられている(すべてに日本語ないし英語の字幕付き)。
- ・共有できる楽曲の投稿
- ・太鼓イベントの情報掲載

共催行事(日本太鼓財団):

- ・10月4日(日) 第22回日本太鼓全国障害者大会(中止)
- ・11月3日(火・祝) 第4回浅草太鼓祭

○WTC 期間中の企画・行事:

11月21日(土)

- 14:45-15:00 WTC オープニング・セッション
- 15:00-16:30 ライブ・トーク・セッション
トピック3 多文化共生社会における太鼓の価値
- 19:30-21:00 ライブ・トーク・セッション
トピック3 地域づくりと太鼓の価値

11月22日(日)

- 9:00-10:30 ライブ・トーク・セッション
トピック1 舞台表現としての太鼓 -その発展と未来-
- 12:30-14:00 ライブ・トーク・セッション
トピック2 太鼓と社会包摂 療育的見地からの太鼓の有効性
- 16:00-17:00 スペシャル・ライブ・トーク/林英哲:WTC テーマソング
- 17:00-17:15 WTC クロージング・セッション

共催行事(日本太鼓財団および東京都支部):

- ・両日の日本太鼓財団東京都支部 WTC ワークショップ(中止)
- ・最終日夜の第24回日本太鼓チャリティーコンサート(中止)

□その他:

・ドキュメンタリー・フィルムの公開:

『TAIKO FILM -太鼓フィルム』(11月7日-11月22日:和太鼓の世界と魅力を紹介)

『BIG DRUM(ビッグ ドラム):アメリカの太鼓』(11月11日~:同地の太鼓文化の先駆者とその活動を記録。本実行委員会によってはじめて日本語字幕が付けられて公開)

- ・WTC クラウドファンディング、Tシャツの販売

1. ライブ・トーク・セッションについて

トピック 1-舞台表現としての太鼓 -その発展と未来- 多様な個性を表現する創作太鼓

小林史子

本セッションでは、舞台表現としての太鼓について、太鼓のエネルギーと音、生活と言語と口唱歌、異なる分野の影響、女性の表現の観点から議論が行われた。参加者は小島千絵子（新潟県／太鼓芸能集団 鼓童）、ケニー・遠藤（アメリカ（ハワイ）／ケニー・遠藤太鼓アンサンブル）、山部泰嗣（東京都／ソロアーティスト）、浅野香（東京都／Gocoo）の4名と、ファシリテーターの宮本芳彦（東京都／宮本卯之助商店）である。

太鼓が舞台上で演奏されるようになって半世紀が経過した。しかし、舞台の太鼓は、未だ若い芸能であり、社会では芸術と認められていない。社会的ステイタスを築くにはどうしたら良いかという課題がある。一方で、創作太鼓には、多様な表現ができるという長所がある。議論は、太鼓の多様性に着目しながら、太鼓へのエネルギーをどのように昇華させるのかを検討する形で進められた。

太鼓には大きな音が求められ、自分のエネルギーを込めた“打ち込み”は、太鼓の特徴的な表現である。しかし、音楽としての繊細さを得るためには小さな音も必要である。山部は、様々なアマチュア団体が活動を始めた頃、“打ち込み”は「大きな音を出せ」という意味だったと回想し、その理解は変わっていく必要があると説いた。ケニー・遠藤は、コンテストの審査員として山部の演奏を聴いたとき、「良い音がわかっている」と感じたという。結論として、“いろいろな気持ちが込められ、感情をゆり動かす音”が重要であることが指摘された。なお、太鼓の音について、小島は、「太鼓に優しい音が好き」とも語っている。

生活と言語と口唱歌については、それぞれの経験が語られた。太鼓の口伝に用いられる口唱歌は、その土地の生活で使われている言語のニュアンスを反映し、太鼓の微細な表現と密接に関わる。

山部は、田植えの経験から、土の硬さと田植え歌のテンポの関係について述べた。同じ岡山県内でも、海の近くと山間部では土の硬さが違い、田植えの作業にも違いが出るという。そのため、田植え歌のテンポも自ずと違ってくる。その土地の生活を実際に体験することで、音楽が形づくられた背景を理解できるという、興味深い例である。また、アメリカ出身の遠藤は、伝統的な日本の音楽を学ぶ時には、正しい口唱歌、発音が重要であると説いた。その際、言語を分かっていることは、助けになるという。宮本からは、逆に、異なる言語圏で和太鼓が普及したことによって、新しい表現が生まれる可能性があるという考え方が示された。また、浅野は、自分が太鼓を打つ上で、歌うことは重要であると語り、身体の奥底から引き出した声を太鼓の音にしていくことには、言語の違いを超えた普遍性があることを指摘した。

小島は、地方の郷土芸能を口伝で学んだ際に、リズムを真似ても、「訛っていない」から「違う」と言われた経験を語った。また、日本と海外で「アイスクリーム」や「バナナ」のイントネーションが異なることを例に挙げ、言語とリズムの関係を示唆した。遠藤は、“間”と“ノリ”は口唱歌以外では学べないと語り、外国人にとっては不利だが、しっかり学んでおくと、それが創作のとき、重要な要素となると述べた。口唱歌は、単なる文字の羅列では

なく、その土地の生活に密着した音声表現として、特有の“間”や“ノリ”といった、微細な感覚を含んだ伝承を可能にするものである。創作太鼓においても、こうした“間”や“ノリ”を習得していることが、個人の表現の幅を広げることに繋がるのである。

太鼓以外で影響を受けたものについては、小島からは舞踊、遠藤からは Jazz、Rock、Latin が挙げられた。また、遠藤は、世界中のアーティストとのコラボレーションでは、不要なしがらみを捨て、互いの芸術への姿勢を希釈せずに学び合っていく姿勢が鍵となると語っている。

山部は、創作太鼓を見て育ったが、師匠が弟子を自分の枠から出さないというような関係性に縛られることがなかったため、ストレスなく他のものに目を向けられたという。しかし、山部は、ルーツを知らずに創作太鼓を続けることに危機意識も持っており、創作太鼓に影響を与えた人と時代などについて、まとめて知る機会が必要であるという見解も述べた。

最後に、宮本から、女性という立場からの太鼓の表現について、小島と浅野に意見が求められた。浅野は、自らが主催する Gocco では、男女が自然に、一緒に音を作っていることを大切にしていると語った。小島は、女性だという理由で、舞台上で太鼓を叩けなかった経験をもち、それが女性の表現をはじめのきっかけになっているという。男女の分け隔てないのが理想であり、その実現を通して、太鼓周辺の芸能が世界の平和に役立つと考えている。

本セッションのまとめとして、宮本は、「世界中の愛好者が技術を通して自分の個性を表現していく太鼓界になれば…」と締め括った。

以上のトーク・セッションについて、評者の専門である音楽教育学（音楽学）に文化政策の知見を混じえた視点から、振り返ってみよう。

本セッションでは、冒頭に、舞台表現としての太鼓が、社会的ステイタスを築くにはどうしたら良いかという課題が示された。タイトルの“その発展と未来”からは、これまでの発展の先に未来への道筋を見出すという、本セッションの基本的な姿勢、また、未来に向けて、さらに発展することで、社会的ステイタスを築くという見通しを読み取れる。

今回の議論では、舞台表現としての太鼓の発展と未来のためには、太鼓の表現が、自分の気持ちやエネルギーを込めて打つことに拠るものであり、個性や多様性が重要であること、不要なしがらみを捨て、創造的であることが鍵になると指摘された。舞台表現を追求するための指針として、核となるものが示されたといえる。ただし、詳細な話題は、音色やリズムなどの表現方法に限られており、今後は、楽曲のまとめ方や即興表現など、構成方法についての議論も期待される。

また、参加者は、いずれも自分のスタイルを築き、高い評価を得ている太鼓奏者である。そのため、太鼓の表現について、奏者の視点からの議論することが中心となったが、冒頭に示された課題に対しては、例えば、下記のような、具体的な方策を見いだすことができる。

- ①口唱歌への認識を深め、伝統に基づいた表現の幅や奥深さを示していく。
- ②異なるジャンルや流派について、互いの芸術への姿勢を希釈せずに学び合う。
- ③創作太鼓の歴史的な経緯をまとめ、「創作太鼓」とは何か、一般的な理解を形成する。

これらの方策を実現するには、個々の活動を越えたアーカイブの整備や、情報発信が必要である。今回、オンライン開催となった WTC のコンテンツは、その端緒といえるであろう。

トピック2・太鼓と社会包摂 療育的見地からの太鼓の有効性
閉ざされた心体から開かれた心体へ

杉本浄

このセッションでは、障がい者の発達支援、難病者の治療、ならびに高齢者の健康維持・認知症防止にいかに関与が有効であるかを、現場の指導者および運営者を交えて話し合った。スピーカーはイーマン・ムイ(アメリカ(カリフォルニア)／Taiko Together)、菅野敦司(新潟県／鼓童文化財団)、ピーター・ヘウィット(イギリス／CCS Taiko)、山内強嗣(静岡県／富岳会)で、ファシリテーターはシドニー・城山(アメリカ(カリフォルニア)／TaikoIN)を務めた。

セッションの前半は、個々の活動概要と自己紹介にあてられたが、その方法はいささか特色あるものだった。今回の4名スピーカーは作業療法士でもあるファシリテーターのシドニー・城山が、パーキンソン病患者のための太鼓プログラムを模索する中で出会った人たちであるため、彼女の出会いと学びの旅に沿って自己紹介がなされていったのである。次に各スピーカーが実践しているワークショップやクラスのやり方について、参加者の具体的な効果を含めて紹介していった。紙数の関係もあり、以下ではセッションの流れに沿わず、各スピーカーの話の内容をまとめていく。

静岡県の社会福祉法人富岳会を運営する山内は、障がいを持つ子供たちの体育活動を専門とし、太鼓を療育に取り入れて45年になる。当初は障がい者施設の余暇活動であったが、やっている内に子供たちがのめり込んでいき、心や体に明らかな変化が見られるようになった。例えばASD(自閉症スペクトラム)の子供が太鼓を通じて他の人たちとコミュニケーションが取れるようになった。こうして太鼓がセラピーとしても有効ではないかと考え、太鼓プログラムを作り、現在に至る。

太鼓はバチを持てば、その瞬間に音が出せる。楽譜の読めない知的障がい者でも、口でリズムを伝えていくことで曲を覚えられる。しかも、1人で打つよりも、2人、3人で打つほうがより楽しくなる。太鼓の良さは、1つには音楽的な要素を持ちながらも、障がい者が一緒になって楽しめること。もう1つは、全力を尽くす経験が得られることである。障がい者の方にとってスポーツはルールを覚えるのが大変難しく、出来ないことがあるが、太鼓はそうした縛りがない。全力でたたいて汗を流すことができる。以上の和太鼓療育においては、「太鼓を学ぶこと」ではなく、メンタルとフィジカルな面の双方を「太鼓で学ぶこと」を第1の目標にしていると山内は強調した。

イギリス・グロスターで10年前に太鼓に出会ったピーター・ヘウィットは、太鼓教本を参考に独学で太鼓を学んだ。その後、特別支援学校で、週に1度、子供たちに太鼓を教える機会を得て、太鼓の効果をすぐに実感したという。例えば、一度も話したことがない女の子がワークショップ後に、「ソーレ」と叫んだ。その後、彼女は多くの言葉を発することができるようになった。以後、私財を投じて太鼓を買い揃え、障害を持つ子供たちを含むワークショップを開催してきた。

彼によれば、自閉症の子供たちに教える際は、まずは楽しいことを前面に出し、太鼓を実際に打つ前に、溜を作るのがコツだという。太鼓を見てもらい、バチに触ってもらう。じっくり準備して早く打ちたい気持ちを十分高めてから、一斉にたたき始める。すると思ってもみないすごい音になる。また、障がい者も健常者も一緒になって太鼓を使ったゲームをやる。大人は童心に帰って子供と一緒に楽しんでくれる。続いて行う反復ゲームでは、まず指導者がリズムをたたき、参加者は同じリズムを返してもらう。次に参加者にもリズムを作ってもらって、みんなでそれを繰り返す。こうしているうちに、参加者たちの自信が高まり、より積極的にたたいてくれるようになる。最後に太鼓のリズムで、曲あてゲームをやると盛り上がりは最高潮になる。また、自閉症の子供の中には音に過敏で耐えることができない子供がいる。太鼓のリズムは体系だった空間与えてくれるため、太鼓をたたくと落ち着

いて集団行動ができるようになる。そういった意味でも太鼓の持つ力は大きいという。

香港出身のイーマン・ムイはハワイを経て、現在、ロサンゼルスを拠点に活動している。ハワイにある太鼓センター・オブ・パシフィックで、ケニー・遠藤やチズコ・遠藤の下で、フェローとして太鼓を学んだ経験を持つ。2013年から太鼓を教え始めた彼女は、2歳児以上を対象としたプログラムを家族と一緒に始めた。教育のやり方は、バリの音楽や文化を基盤としている。つまり、すべてのものは繋がっている、支えあっている、というもの。また、オルフ音楽教育のアプローチをベースにも置く。彼女の指導では、ボディー・パーカッション、歌、ゲーム、ダンス、チャンティング(詠唱)、視覚芸術、物語のストーリーテラー、そして太鼓を用いる。

太鼓のクラスを開く際、どのような環境にあろうとも、参加者と信頼関係をまず築くことが大事。なによりもその場の環境がリラックスしたものであれば、集中力も創造性も高まるという。30名から50名くらいの参加者に20分から30分間、一切言葉を使わないで太鼓を教えることもできる。こうしたアプローチは母国語が異なる人たちを対象とする場合にとっても効果を発揮する。また、彼女は参加者を重視して、彼らをワークショップの中心に据えることを心掛けているという。例えば、参加者が挙げてきてくれたアイデアを中心に、その流れに指導者自身が身を任せていくようにしている。また指導者自身が太鼓を心から楽しんでいると、参加者たちにもそのことがきちんと伝わるという。

太鼓のたたき手としてではなく、鼓童の活動の理念に共感して参画し、これまで事務方として活躍してきた菅野は、太鼓を使ったプログラム「エクサドン」の活動を紹介した。「エクサドン」は鼓童文化財団が2014年に佐渡市とともに始め、医師とインストラクターとともに練り上げていったものである。ここではその指導内容ではなく、高齢者にどのような影響を与えたのかを実証実験した結果について触れた。実験では各15名からなる2つのグループを作り(平均年齢75歳)、1つは約2か月間にわたって毎週太鼓をたたいてもらい、もう1つは全くたたかない。太鼓をたたいたグループはポジティブティエを測る5つの指標のどれでも効果が表れた。高齢者にとって何より障害であるのは、不健康な習慣よりも孤独な状態になることであり、「エクサドン」を通して社会的繋がりを回復させ、ポジティブティエを上げることで健康で長生きできるようになることがわかった。菅野は今後「エクサドン」の対象者を高齢者から、もっと幅広い年齢層を対象にしていくと語った。

以上のように太鼓は何かしらの障害や難病や身体面でのトラブルを抱えた子供、大人、高齢者たちばかりか、健常者の人々にとっても、積極性、協調性、集中力、喜びなどを引き出ししてくれる魔法の楽器である。参加者のみならず、指導する側にも良い影響を与えてくれる。

今一度整理してみよう。太鼓は潜在的な個々の力を引き出し、顕現化させる効果がある。体の躍動、掛け声、リズム、振動を通して内発するエネルギーが放出されるとともに、心の奥に隠れた自己をも表に引き出ししてくれる。それにより、他者と向かい合うことを可能にし、協調性を得ることにもなる。さらに、たたき続けることで、体力だけでなく、没頭する行為や持続性をも向上させる。ただし、この一連の流れが可能になる唯一の条件がある。太鼓をたたくことが何よりも楽しいと感じることである。太鼓が療育、治療、予防、維持において有効であるのはこうした環境が整う場合であろう。

このセッションで余すことなく示された太鼓の大いなる可能性。その一方で、その社会的活用と認知においては、いまだ序章の段階であることに気づかされる。また、菅野が指摘するよう、太鼓の効果については科学的にも医学的にも実証データが少ない。そのため、山内をはじめとする今回のスピーカーたちが持つ豊かな指導経験を集積して、活かしていくような開かれたプラットフォームの形成をぜひとも期待したい。こうしたプラットフォームを通じて、指導者の交流、世代を担う若い指導者の育成、効果データの蓄積と公開がより一層活性化していくのではないだろうか。

トピック 3-グローバル：多文化共生社会における太鼓の価値
多様なままた響き合う太鼓コミュニティをめざして

石野隆美

太鼓を打つ人びとが世界的に増加し、太鼓をめぐる価値観もまた多様化を続けている今日において、太鼓はいかなる共通的な価値（コア）を有しているのか。また、多様な太鼓団体やコミュニティが生まれているなかで、ともに太鼓を学び合い、価値を共有し合うことはいかにして可能であるのか。「多文化共生社会における太鼓の価値」と題されたライブ・トーク・セッションでは、以上の問題について議論と意見交換がなされた。登壇者は長谷川義（大分県／ゆふいん源流太鼓）、デレック・大江（アメリカ（カリフォルニア）／Taiko Community Alliance）、ジョナサン・カービー（イギリス／European Taiko Conference, Kagemusha Taiko）、ルーカス・村口（ブラジル／一心太鼓）、王妙涓（台湾／台湾太鼓協会）、そしてファシリテーターのロイ・平林（アメリカ（カリフォルニア）／サンノゼ太鼓）の6名である。

まずは各国の太鼓団体の現状について登壇者から報告があった。太鼓は今日、教育や音楽活動、健康維持や自己実現など様々な価値観や動機、スタイルのもとに取り組みられており、そうした異なる価値観をシェアしていく方が模索されている。たとえばジョナサン・カービーの報告によれば、ヨーロッパでは「日本文化」に触れることを目的に太鼓を始める者はごくわずかであり、健康維持や太鼓を通じた社会的なつながりの創出に価値を見いだす者が多いという。ゆえに特定の共通理念を取捨選択しコアに据えることよりも、個人間・団体間でのコミュニケーションや学び合いの機会を広げていく重要性が指摘された。

ひとつの団体内においても、たとえば性別や世代によって太鼓に対する考え方が異なる場合もあり、差異をいかに発展的に方向づけていくかが課題になる。日本でもベテランの太鼓を若手が「盗む」、という一方向的な師弟関係が一般的であったが、今日では若い世代が次々と新しい要素を太鼓に取り入れたり、伝統を新しい解釈で表現したりしている。ベテランもその姿勢を学び、同時に歴史や技術を若手に教えるという切磋琢磨の関係が日本では生まれつつあると、長谷川義から報告された。またこのような若い太鼓打ちの活躍は、ブラジルにおいても見いだされる。ルーカス・村口によれば、日系ブラジル人が2世・3世と世代を経ていくなかで、若い世代が自らの日本人としてのルーツに関心を向けなくなっている。他方で2000年代以降の国内太鼓ブームは十代の若い世代を中心に勢いを増し、楽しみや日本文化とのつながりのために太鼓が打たれているという。そこには太鼓がブラジルにおける日本文化の醸成に寄与する可能性があることが示唆された。

また、ルーツや歴史的背景を継承していくと同時に、それらを共有していない人びとも太鼓コミュニティに参画できる仕組みづくりもまた重要である。この論点について、デレック・大江からは、TCA (Taiko Community Alliance) が掲げる6つの基本理念が紹介され、なかでも他者への「敬意 (respect)」や「社会包摂 (inclusivity)」に関する取り組みが述べられた。日系アメリカ人が培ってきたコミュニティを土台としながら、太鼓に多様な価値観を持って関わる個人や団体の動画を収集し、それを共有することができるデジタルプログラムを準備することで、国籍や年齢、宗教、性的趣向といったあらゆる差異を包摂し互いに敬意をもって受け入れ合う素地づくりがなされているという。加えて、望む

者がみな太鼓に関わり、太鼓を通じて学びを得ていくためには、そのコミュニティ基盤を支える内外からの様々なサポートが求められる。これについて王妙涓から、事情により学校に通えない子供たちが太鼓を通じて様々に学んでいくための支援活動について報告がなされ、太鼓の継続に必要な環境的サポートの重要性が確認された。

全体ディスカッションでは、太鼓のさらなる発展への次なる一歩として、ビデオやオンライン動画共有サイトをはじめとするデジタルメディアの活用により、リソースの限定性にあえぐ太鼓グループに資料を共有していくこと、またオンラインの場を利用して世界の太鼓グループが国境を越えてつながる機会を創出していくことの重要性が確認された。

それでは、文化人類学を専門とする評者の立場から、ここまでのトーク・セッションについて、「多様性」「コミュニティ」「映像」を切り口に振り返ってみたい。

まず、このトーク・セッションが当初の議題に掲げた問題——共通した「コア」となる価値観をいかに築くか——は、登壇者たちの議論を経て次第に相対化されていったようにみえた。すなわち、太鼓をめぐるなんらかの単一的価値や起源（root）を決定しそれを多様な太鼓団体に当てはめることでコミュニティをつくろうとするのではなく、太鼓打ち・太鼓団体がそれぞれ育んできた多様な文化と背景（まさに root“s”）を「多様なまま」にゆるやかに結んでゆくことの重要性が、議論を通じて浮かび上がっていた。

多様性と差異をそのままに受容する open-ended なコミュニティづくり。それは太鼓演奏そのものときわめて類似してはいないだろうか。複数名での太鼓演奏がその強烈な響きとリズムによって聴衆をも巻き込みながら練り上げるあの一体感と興奮は、しかし同時にそこで太鼓を叩く諸個人の緻密な技術や想いに基づいていることを思い出させるものだ。太鼓打ち個々人の多様性を尊重したままに、リズムと身体動作の同調によってゆるやかに全体で響き合うこと。いわば差異を維持しながら共振すること——これは「コア」といいうる価値観かもしれない——こそ、多様な太鼓打ち・太鼓団体の連帯のために必要な精神でありうると、ディスカッションは示唆していたように思われる。

感染症の影響で WTC はオンライン開催となったものの、オンラインツールやデジタルメディアを介した個人間・団体間での交流の可能性が確認されたことは重要である。だが、オンラインイベントの企画や映像資料データベースの拡充が必要であることは疑いえない一方で、同時に喚起力のある映像資料をいかに各団体が準備していくかという点についてもさらなる検討が待たれるだろう。映像でいかにその太鼓の個性や叩き手の身体性を視聴者に伝えることができるか。また視聴者が映像を通して一緒に叩いているような感覚を共有したり、映像から個々人のバックグラウンドやストーリーを感じ取ったりできる映像とはどのようなものか。この点についての試行錯誤と意見交換の機会が求められる。

重要なことは、映像はそうした身体性や共振的な感覚を視聴者にもたらず力を秘めているということだ。文化人類学者・名和克郎はネパールの太鼓演奏が醸し出す独特の熱狂感やグルーブについて、現地で自ら撮影した音声つき動画データをもとに分析しているのだが、名和は太鼓演奏の動画を何度も繰り返し視聴するなかで初めて、その場で生じている特殊な熱狂感を（撮影時以上に）クリアに実感できるようになったという（名和 2020）。そのような喚起力ある映像資料をいかに作り、発信していくか。またその過程をレガシーの継承や交流の機会にいかに結びつけていくかが、今後の検討課題となるだろう。

トピック3-ローカル:地域づくりと太鼓の価値 「選択縁」とポリフォニックな太鼓の共同体

鍋倉咲希

本セッションでは、日本における地域社会と太鼓との関係をテーマに、とくに郷土芸能(民俗芸能)の継続という観点から議論が行われた。参加者は小岩秀太郎(宮城県/縦糸横糸合同会社)、小林泰三(島根県/小林工房)、山田純平(愛知県/山田純平×熱響打楽)、木下善貴(千葉県/成田太鼓祭り)、西田明日海(千葉県/大学太鼓連盟)の5名と、ファシリテーターの神谷唯(WTC コーディネーター)である。

今日、世界的に普及している和太鼓や創作太鼓は、太鼓が主役として扱われていることが多い。しかし、日本の地域社会における太鼓は、これまで必ずしも主役であったわけではなく、地域の郷土芸能の一部として人々に受け止められてきた。本セッションでは、参加者の活動紹介を通じて、地域社会と太鼓の関係をめぐる通時的な変化が明らかになった。

まず、セッションは海外の聴衆向けに日本の地域における郷土芸能の役割を確認するところから始まった。東京と東北を行き来しながら、郷土芸能や地域文化の発信を行う小岩は、日本の地域における郷土芸能が、そこに住む人にとって「祈り」の意味をもっていたと述べる。人々は作物の豊穰や無病息災、平和などを祈願する「神事」として舞い、太鼓を叩いた。このとき主役は舞踊や演劇、歌であり、太鼓は「伴奏」としての役割を果たしていたという。

しかし、今日の郷土芸能はそうした儀礼性を失いつつあり、地域内での継承も容易ではなくなっている。だがそうした困難にもかかわらず、各地域ではいまでも郷土芸能の継続が試みられ、人々の誇りとして考えられている点には注目すべきだろう。今日において郷土芸能はいかなる方法で継承・運営されているのだろうか。ほか4名の参加者による活動紹介は、太鼓および郷土芸能の現代的なあり方を示していたように思われる。

まず、小林が携わっている石見神楽は、継承している団体が130も存在し、3歳から80代に至る幅広い年齢層が参加している特徴的な事例である。小林によれば石見神楽の層の厚さは、年少のころから先輩や大人が近くにおり、芸能を「格好いい」と思える環境があることによるという。郷土芸能を担う人々の「生き方」に日常的に触れることができる環境は、継承のための基盤となっている。

また、愛知県西尾市で創作和太鼓の活動を行う山田は様々なイベントを仕掛けている。とくに千人が一堂に会し太鼓を打つ「西尾千人太鼓」はその代表的なものだ。山田は活動継続のために、イベントを無料にせず、質を高めることを重視している。行政や企業からの支援、ボランティアなどに頼ることが難しい今日では、参加者自らの力で魅力を創出し、地域と太鼓のつながりを保つ戦略が必要である。2014年から始まった西尾市での活動は、すでに様々な世代の市民が太鼓に触れる機会となっており、地域に深く根差す様子がうかがえる。

木下の携わる「成田太鼓祭り」はまちづくりと結びつきが強い。成田山新勝寺という著名な寺を中心に持つ成田町は、昔から太鼓との関係が深かった。毎年60を超える太鼓チームが参加する「成田太鼓祭り」は、郷土芸能を紹介するという目的から、成田山の表参道にある商店が中心となり始まった。この経緯から今でも地域と参加者の距離が近いことや、照明や音響などをすべて学生が行っていることが特徴である。「成田太鼓祭り」は住民による草の根の活動によって地域内外の参加者が入り混じり、出会いが生じる磁場になっている。

また、次世代の活動を担うコミュニティとして、西田が参加する大学太鼓連盟は若者同士のワークショップや情報交換、交流の場を生み出す重要な場所になっている。将来的には、ここで通じ合った人々が各々の地域に散らばり、また新たな活動を芽吹かせていくに違いない。ファンリテーターの神谷は、地域と太鼓の関係が続くためには、太鼓が「かっこよくあって、魅力的で、大好き」であることが重要だと結論づけた。「神事」から離れた太鼓をいかに地域社会のなかで継承していくのか。各地域における模索が今後も続くだろう。

郷土芸能の通時的な変化を、ここでは学術的な文脈に置き直してみよう。小岩が述べたように、かつて地域社会における芸能や祭り、太鼓は「神事」であり、人々が神と通じ、また地域社会の結束力を高める手段であった。しかし、近代化や都市化などの社会的な変化は、地域社会のあり方を変えたとともに、従来の芸能の意味を徐々に失わせてきた。

だからといって郷土芸能が消滅したわけではないことは、本セッションをみれば明らかである。現代では郷土芸能や太鼓に新しい価値が付与され、「神事」とは異なる論理のもと、活動が広がっている。たとえば、WTCのほかのセッションでは、海外において健康増進や日本文化の理解のために太鼓を選択する人がいることが指摘された。また、成田町のようにまちづくりの手段として太鼓がクローズアップされたり、西尾市のように太鼓によって世代を越えたつながりが生成したりするさまも見てとれる。さらに、新潟県佐渡島を拠点に活動を行う太鼓芸能集団鼓童のように、芸術表現として太鼓が極められていくこともある。

今日「太鼓を打つ」と言っても、個人やグループによってその目的は様々だ。また、その担い手も、地域内だけでなく地域外から訪れる参加者にまで広がっている。太鼓という一つの物を媒介にして、太鼓を打つ人、それをサポートする人、イベントや舞台を仕掛ける人、観客、観光客など、地域内外の様々な人が様々な目的のまま交じり合う状況は、アメーバのように変幻自在に伸び縮みする「太鼓の共同体」と言えるかもしれない。

評者が専門とする社会学において、こうしたつながりは「選択縁」(上野 1987)と呼ばれてきた。これは地縁や血縁、社縁など従来の紐帯にしばられずに、自らの趣味やライフスタイル、価値観にもとづく「選択」をして、人々が新しい縁を作り出す状況を指している。

この観点からみれば、太鼓や郷土芸能も「選択縁」として位置づけられるだろう。神と通じ、地域の共同体を維持するために行われていた「神事」としての郷土芸能から、人と人とが通じ合い、自分の価値を実現ながら地域のネットワークを生み出すための郷土芸能へ。現代日本の郷土芸能や太鼓はこのように新たな回路で地域社会を支えるに至っている。

ただし、ここにも継承の困難という問題は付きまとう。人々の選択によって太鼓の文化が維持されるならば、そこに「選択され続けなければならない／選択し続けなければならない」というプレッシャーが生まれることもある。太鼓の共同体を、その担い手も楽しみながら継続させていくにはどうすればいいのか。狭義の「郷土芸能」の枠を超えて、地域や世代や性別にかかわらず、様々な目的をもった人々がその多様さのまま共同体に参加できるポリフォニック*な仕組みづくりが求められている。

* ポリフォニー (Polyphony) は本来、多声音楽や作曲様式を示す音楽用語だが、人文・社会科学においては、複数の声や意識が融合しないまま対話する動的な状態を示す概念として用いられる。ロシアの思想家ミハイル・バフチンの文芸理論をもとにしている。

グローバル・ヴァナキュラーとしての和太鼓

門田岳久

オンラインで開催された 2021 年の WTC は、COVID-19 の拡大により世界が分断される中で、それに抗して、太鼓や芸能をもとに人々のつながりを回復しようとした極めてチャレンジングな試みだったと言える。もちろん太鼓という営みが身体的な表現にもとづいて、演者同士、また演者と聴衆が共鳴し、情動を共有するパフォーマンスであることを考えると、対面で開催できればより大きな効果があったに違いない。しかし図らずもオンライン開催になったことで、この時期だからこそ多くの人に希望を与えたとともに、太鼓の持つ価値の源泉を確認することができた。その価値をここでは、ひとまず「地域とともにありつつ、地域を越える力」と表現しておきたい。

今回はさまざまなセッションを見て、特に太鼓とコミュニティをテーマにディスカッションされた「地域づくりと太鼓の価値」(2020 年 11 月 22 日)に焦点を置いて、文化人類学・民俗学の観点からその意義を考えてみたい。その回では、石見神楽や成田太鼓祭りなどを実践する地域の方、また大学の太鼓サークルで活躍する方などがパネリストとして参加していた。チャット画面には世界中のオーディエンスからの英語中心の書き込みが多く、太鼓が日常生活や地域に根付いている日本の環境を直接見聞きし、感銘を受けたのではないかと思われる。

ところで、しばしば「地域」は「コミュニティ」とイコールで語られがちだが、必ずしも同一ではない。人間が集まり、構造化したさまざまな集合性をコミュニティというならば、地域はその一つである。コミュニティが地理的な形をとって表れたものが、特に地域コミュニティと呼ばれる。石見神楽の事例で示されたように、太鼓はもともと、民俗芸能(郷土芸能)として地域コミュニティで傳承されてきた。傳承ということは、地域の日常の暮らしと不可分であり、一年の生業のサイクルや祭礼・信仰行事の一環に組み込まれ、上の世代から下の世代へとフェイストゥフェイスで伝えられるということを意味する。祭礼と太鼓が不可分であるということは、祭礼の盛んな地域では太鼓や芸能も盛んであり、かつ、祭礼が盛んであるためには、生活するに十分な糧を得る生業が発達していることが条件となる。例えば、著名な太鼓芸能集団鼓童が生活の場としている新潟県の佐渡島のように、近世から金銀山や交易で栄えた地域では、一般に芸能が盛んだと言える。逆に言うと、伝統的な生業が衰退してくると芸能もまた危機に陥る。

日本全国で 20 世紀に起きたのは、都市化や産業構造の転換によって地域で芸能を支えられなくなり、傳承から他の形態へと、その存続が変化せざるを得なくなったことだ。その一つは文化財として指定され、保存会などによって繼承されていく道であり、もう一つは、学校教育に取り込まれていくという道である。実は全国的に見て、現在、民俗芸能のもっとも強力な「傳承母体」は学校だと言って良いだろう。小学校では総合学習の時間に地域の芸能が取り上げられることが多々あり、中高になるとクラブ活動や部活が中心となる。転勤で赴任してきた教員にはローカルなワザと知識がないため、学校近隣の人々が講師として招かれることもある。教育という制度的基盤を得た「学校芸能」(呉屋 2017)は、太鼓や芸能の再生産を考える際に無視できないセクターとなっている。

パネリストの西田明日海氏が述べていたように、こうした学校芸能を通して太鼓に触れたという人はますます多くなっており、そのような人々が大学でより本格的な太鼓サークルを立ち上げ、世界的な太鼓のカンファレンスに出場することも珍しくない。また社会人を中心に行われる太鼓サーク

ルや太鼓スクールにも、講師や生徒として学校芸能経験者が多いと思われるし、プロの太鼓奏者になる人の中にも例外ではない。今や学校芸能は太鼓の出発点であり、裾野拡大になくてはならないものになっていると言える。

このように見ると、太鼓の継承はかつてのような地域の伝承から、学校や保存会、サークルなど、さまざまなコミュニティに移行している。一つの地域での伝承はいわば地域住民だけに開かれた「秘技」に近い性格を帯びるが、現代的なコミュニティにおいて地域を越えて伝えられることで、太鼓はコモンズ(共有物)として、世界中で多くの人に実践されるようになった。

しかし、今回のトーク・セッションで人々を引きつけたのは、このような太鼓の脱地域化・無国籍化ではない。むしろ逆に、太鼓が成田や石見など、特定の地域に現在でも根付いているという事実ではないかと思われる。いかに太鼓が世界的に実践されていても、その打ち方なり演目なりのルーツが、「和太鼓」という以上は日本のある地域に存在し、今でも切り離されていないのだというコンセプトは極めて重要である。なぜなら、太鼓に惹き付けられ、日々鍛錬に取り組む世界中の人にとって、それは無国籍な「楽しい楽器」の一つではないし、もちろん単なるエクササイズでもないからだ。彼らがコミットしているものは「和太鼓」という地域性を持つものであり、かつその精神性や歴史を含めたものとして捉えている人が多いからである。

現代社会はますます多くの情報、サービス、商品、価値、モノが無国籍化している。Spotify がスウェーデン発祥で、WhatsApp が中国発祥、などと聞いてもたいていの人にどうでも良いこととして片付けられるだろう。音楽を聴いたりメッセージをやりとりしたりするプラットフォームの運営会社が、どこの国にあらうが関係ないからだ。グローバル資本が覇権的に世界を覆っていく現在、どこに行っても同じようなモノとサービスが並んでいる。それとは異なり、あらゆる地域に、その場所でしか手にできないものごとはたくさんある。ある地域に土着的なもの、覇権的に広がっていくものではなくその地域の人々の生活の一部として実践されてきたものは、「ヴァナキュラー」(Vernacular)と呼ばれる(Bauman 2008)。権力や巨大資本と無関係に、庶民の日常的な実践として伝承されてきた太鼓は、ヴァナキュラーな芸能の典型例である。

世界がグローバルなものやヴァナキュラーなものに二極化していく現在、特定の地域に強いルーツを持ちながらも、他地域の人にとっても触れることができるものは、さほどたくさんあるわけではない。太鼓が希有なのは、特定の世界的企業やプロモーション企業が覇権的に推し進めたわけではないにも関わらず、20 世紀後半のアメリカなど中心に世界に広まり、今や極めてグローバルな現象になったということである(Konagaya 2001)。しかも、上で挙げた例のようにそのルーツに人々は強いこだわりをもち、太鼓がどこから来たものかということは常に意識されている。そのような期待がある中で今回のセッションを振りかえると、まさにそのルーツとなるような、地域的な祭礼における太鼓の「伝承者」が世界中の眼前に示された機会だったと言える。

太鼓は現在、ヴァナキュラーでありながらも、同時にグローバルでもあるという一見相反する性格を保っている。寿司やラーメンなどの和食もまた日本発祥でグローバルになったものだが、食はそれ自体として楽しめるものであり、ルーツから切り離されたところで何ら問題はない(私たちは日常、パスタを食べていたとしても、イタリアとのつながりはあまり意識されないだろう)。ゆえに和食はますます「日本」から切り離されている。食が広がるには、こうしたプロセスはなかば不可欠であり、必ずしも悪いことではない。他方太鼓の場合、グローバルになってもヴァナキュラーな性格を切り離していない。言いかえると、地域とともにありつつ、地域を越える力を持っており、それは希有な価値として多くの人を引きつける要因になっている。

もちろんこれは、日本の太鼓パフォーマーがより保守的に、地域で伝承されてきた「正しい」太鼓

のあり方に固執すべきであると言うことではない。ヴァナキュラーとは伝統的や不変というニュアンスではなく、実践者の創造性を含むニュアンスがある。日本で太鼓を実践している方々は、常にチャレンジしながら、新しい試みをしていくことが大事であり、それを動画などさまざまな手段を使って世界に発信することが期待されている。なぜなら和太鼓のルーツである日本人の新たなチャレンジは、世界で太鼓を試みる人にも必ず勇気とチャレンジ精神を与えるからだ。

＜共＞の世界としての太鼓が持つ可能性

小西 公大

World Taiko Conference のトーク・セッションを周遊しながら感じたのは、まずもって太鼓の持つ意味や可能性、そして社会的役割の多様さであり、その力を使った運動を推進すべく努力している人びとの極めてポジティブで真摯な姿勢であった。

その方向性の広がりや、つながりの創出やコミュニティ形成／維持のような関係性にまつわるもの、個別の音の重なりが生み出す「共創」や、プレイヤーそれぞれの「内なるクリエイティビティ」の発露などに関する創造性にまつわるもの、社会的属性や年齢、性的指向性などを超えた結節点を創出することや、社会的に周縁化されてきた人びとへのアプローチなどのような包摂性にまつわるもの、道具(楽器、機材)やルール、スキルなど音楽がもつハードルを易々と乗り越えてしまう太鼓(打楽器やリズム)の持つ近接性、精神疾患や障害、健康維持など医療的見地からのケアの文脈など、その方途は多岐に渡り、さまざまな角度からその実践の可能性が見いだされていた。一般的に「和太鼓」が教育の文脈で語られるときは、「日本の伝統の理解」や「地域文化の体験」などといった、知識・技能を中心としたカリキュラムに還元されてしまう傾向があるだろう。しかしここで語られていたのは、多くの場合、ローカリティを大切にしつつも、その根強いコンテクストを超えたところで太鼓＝Taiko の持つ潜在的な力をいかに発揮することができるかという、普遍的でコスモポリタンのな色彩の強い議論であったことが刺激的であった。

こうした「可能性」がなぜここまで探求され、強調されなければならないのだろうか。その背景には、グローバル化の浸透が巻き起こす様々な社会現象に対する批判的な視点がいくつか存在しているように思われた。「ネオリベ」と呼ばれるような市場原理至上主義がもたらす新たな分業や格差問題、社会の流動性の増大による孤立や過疎化、個人の承認をめぐる不安定性、均質化が生み出す周縁化や排除構造の強化、ICT 技術などの革新による既存の経済構造の不安定化など、急激な社会変化への対応策として、関係性や包摂性、ケアの必要性が急務であることは間違い無いだろう。これらの現象は社会の流動性や不確実性を加速度的に拡大させ、生活世界における既存の(比較的)安定した紐帯を喪失させ、社会を砂粒のように分離した「個人＝individual」が右往左往するアノミー(無規範)状況へと変転させていったのではないか。そのような不安感が根底にはあると考えられる。これらの社会的背景を前提とした上で、Taiko をめぐる多様な活動は、時に対処療法として、時に新たな社会的機能を担うものとして、注目を浴びてきたことがよくわかる。つまりこのような時代だからこそ、生産性や効率性を中心とする社会の主流から歌舞音曲の一形態として周

縁化されてきた Taiko (サウンドやリズム、突き動かされる情動) に着目し、失われた社会の躍動感を周辺から取り戻そうとする意図が、本会議の通奏低音となっていたと思われる。

さて、近年の音楽をめぐる研究活動にみられる転換(モノとしての音楽からコトとしての音楽)も、こうした運動と無関係ではなく、次第に大きな力を持ち始めているといえる。音楽を「作品」として、一義的に鑑賞し解釈するという静態的モデルから、音楽そのものを「実践」として捉え、音を通じた相互コミュニケーションを基盤とした創造行為、もしくは現れ出る音と身体的表現の創出という活動形態として捉えなおそうとする、動態的モデルへと転回させていこうとする動きである。クリストファー・スモールはこうした論理的転換を「ミュージッキング」と呼びならわし、その可能性を主張した。音楽はオーディエンスとして受容するものではなく、演奏者／聴取者という二分法を超えて、双方ともに体験し創出に携わる包括的な実践として捉え直すことを提唱している(スモール 2011)。その意味で、よりアクセシビリティが高く、包摂的な空間を構成しやすい打楽器の世界は、より直感的で直感的な共創関係を生み出すツールとして優れた効果をもたらすものだと考えられる。私たちは身体というマテリアリティさえあれば、いかなるサウンドもリズムも作り出すことができるのだから。一方で、それを「和太鼓」という文脈から考えたとき、そこにどのような特定の意味論や方法論を提唱できるのか。単純に「日本人にとっての伝統文化」であることを超えて **percussion** としての可能性を探りつつ、かつそのヴァナキュラーな文脈の中で Taiko の持つ意味の深度を掘り下げていくような、双方向的な言語化へ向けた議論がこれからも必要となるだろう。

他方、音楽教育の文脈でもこのようなサウンド／リズムを通じたコミュニケーションの可能性を追求しようとする動きが出てきている。音楽教育はいわゆる高尚な「芸術文化」の鑑賞と器楽トレーニング中心主義から脱し、動的な「音楽情動」とコミュニケーションを創出するための様々な方法論が模索されはじめている。情動の共有が「フロー」を生み出す仕組みを学びの空間へと導入するために、カジュアルにリズム的な運動を生み出していく過程を構成し、社会性と身体性が組み合わさった際の自発的で豊かな体験(情動共有)を生み出していく手法が実験的になされている(寺澤 et al. 2013)。このような動きは、特に Topic2 のピーター氏やマンマン氏の教育実践とも連動するもので、これからの社会実装の拡大におおいに期待したい。

前述の通り、WTC を通じて私が感じたのは、Taiko に秘められた効能／機能や社会的に果たすことのできる役割などをはじめとする、多岐にわたる潜在的な可能性であり、かつそうした力を引き出しながら具体的な実践を繰り返す人びとの熱意だった。メディア技術の発達やサブスクリプションの消費が深く浸透し、音楽の消費形態がますます個人化していく現代社会において、Taiko を通じた(競争ではなく)共創の世界を模索していくコミュニケーションの場が広がりをみせていることを実感することができた。この会議での対話が新たな運動を生み出していく可能性を秘めたものであることは間違いないだろう。「音は身体の内にもありながら、身体の外にも存在する。つまり音楽は、身体の内と外に同時に存在し、個でも、公でもない、いわば<共>の領域(共同主観的な領域)を生み出すものとして存在している」と芸術社会学者の中村美亜は記している(中村 2013)。「コト」として、実践・経験としてその力を発揮し続ける Taiko の<共>の世界における多様な可能性を感じる体験だった。

スペシャル・ライブ・トーク
太鼓を使った創作の原点と舞台芸術としての太鼓

杉本浄

WTC 期間中最後の枠に設けられたスペシャル・ライブ・トークでは、創作太鼓界において先駆的な役割を果たしてきた林英哲が登場した。インタビュワーは WTC の発起人の一人で、事務局長を務める西村信之があたった。

まずは WTC のテーマ曲を林に依頼したことから、作曲の経緯や苦労話からこのライブ・トークは始まった。誰にでも演奏でき、どのような楽曲であろうと柔軟に演奏できる類の曲というのが WTC 側の条件であったことから、かなりの工夫が必要であったことを林は明かす。その上で、曲のタイトル『遙かな囃子』の囃子について説明がなされた。その特徴は古くから日本にあった、跳ねるようなリズムで、各地に地のリズムとして、その土地その土地のニュアンスを有しながら広がっている。

具体例として林は稽古で訪れた各地の太鼓の地のリズムの特徴を紹介した。林が最初に太鼓を習ったのが福井県三国港の太鼓で、次に埼玉県秩父地方の屋台囃子、3番目が東京都の八丈島の太鼓だった。どれもアドリブの要素が多く、特に決まった打ち方はなかったという。例えば、三国は「たったか たったか たったか」という「三つ打ち」のリズムに乗せて、アドリブで楽しそうに曲を打ち込む。林はたたいている人たちの中に入って曲を覚えようとするが、曲の構成がつかめず大変に苦労したことを明かす。

こうした例を一通り紹介した上で、「その土地で生まれていない人間にとって、その土地の太鼓を覚えることは、他所の言葉を覚えるくらい難しい」と林は断言する。「そこで生まれた子供は何でもなくしゃべっているが、他所から来ていきなりしゃべりなさいと言われても全くできないのと同じで、太鼓のリズムも全くできなかった」と告白する。ではどうやって「方言」のある太鼓を身に着けたのか。

「テープレコーダーを使い、録音をしてスロー再生して、それをすべて譜面に書き起こした。そこで音の割方やアドリブのところの音の構成を分析して理解することにした。それが私の覚え方だった」。この点はすでに林が別の著作の中でも指摘しているところであるが、改めて自身の言葉で語られると感慨深いものがある。創作太鼓が今日のテクノロジーなくして成立できなかったことは、それそのものが優れて現代的な現象であることを暗示している。

こうしてテープレコーダーを介して習得した地方の太鼓を、そのまま舞台でやることは考えていなかったと林は告白する。当時属していたグループは、「現地のものの形を借りて、舞台でやるための新しい曲を作るという方向に向かった」ことは、「自分にとっては幸いだった」とする。なぜか。「同じ日本の文化ではあるが、現地の芸能を他所の土地で生まれた人間がそれをそのままやるのがとても失礼なことだ、やってはいけないことなのではないか、という気がしていた」ためである。

実際に太鼓を続けていく中で、伝統側との間に問題が生じた。例えば、林たちは秩父の屋台囃子を太鼓の数を増やして、一つのストーリー性のある、クライマックスのある新しい曲にした。すると舞台用に新しくアレンジされた方を伝統ある太鼓として誤解され、それが世界に秩父の太鼓として広まってしまった。地元の長く継承されてきた太鼓と明らかに違うにもかかわらず、である。こうしたこともあり林は、自分で新しい曲を作っていかなければならないと強く思うようになったという。この点は日本で創作太鼓に取り組んでいる人間にとって、決して無視できない重要な指摘になる。

海外の大都市で開催されるようになった日本祭を例にすれば、林の指摘はより鮮明になると思われる。いまや創作太鼓は日本祭に欠かすことのできない演目である。主催者の側で、太鼓を日本の伝統として紹介することがなかったとしても、現地の人々にはそれが何かしら伝統的なものとし

て受け取られている恐れは十分にある。このことはアジア各地の日本祭で演じられる、よさこいソーラン節の踊りの群舞とも共通している。太鼓も踊りもエッセンスは伝統に負いながらも、極めて現代的で、共時的な複合文化として表現されているのである。

トークの最後のところでも林は、日本の太鼓には地域で継承されてきた伝統的な太鼓と、新しい舞台表現を試みる太鼓の二つの流れがあることを、まず太鼓の打ち手はきちんと理解する必要があると警鐘を鳴らす。こうした理解は、おそらくは林が辿ったような新しい舞台芸術の表現として、太鼓をさらなる自由な領域へと導く可能性を開くと思われる。肝要なのは、伝統や創作といった分類以前の場所に、創り手として常に身を置き続けることなのだろう。

では、林は太鼓の打ち手として新しいものを作り出すために何が必要と語るのか。西村の質問に答える形で、1つ目は多様なジャンルの芸能や舞台芸術を学ぶことにある。1970年代に林は先述した3つの地域に稽古に行っただけでなく、神楽や鬼剣舞の踊りも習った。そのほか、邦楽、いわゆる純邦楽と言われている、日本舞踊、長唄、三味線、また歌舞伎の笛や鳴り物、さらに大太鼓、津軽三味線、クラシックバレエも習った。こうした今日でもなかなか得難い経験はまた、林が太鼓に関して新しい創作がなされていないことを気づくきっかけにもなったという。例えば、日本舞踊などでは、古典の踊りも踊るが、必ず新しい創作も作って発表する。こうして林は太鼓で新しいことをやってみようと思ったが、「しかし、それは自信があって始めたことではなかった」とも言う。

2つ目は他のジャンルの舞台芸術をよく見て、観客の反応を含めて学ぶことにある。面白いミュージカルがあるとすれば、それを太鼓でどう表現するのかをまず考える。その中で分かってくるのは、打ち手が舞台の上で動けることが太鼓の特徴であり、この特徴を最大限活かしていく作品にしたいと思うようになったという。

3つ目は、こうした多様なジャンルから学んできたことに加え、「秘すれば花」を自身の太鼓表現にも取り入れていることである。よく知られるこの文言は、600年前の人で、能楽を大成した世阿弥が述べた舞台芸術の神髄であるが、誰も見たことがないもの、人がビクビクして驚いてくれるようなことを舞台の上では見せなければならないとするものである。「自分も制作するときは、できるだけ人と似ていないもの、だれもやっていないものを作りたいと常に思う」と吐露する林は、続けて「しかし、誰もやっていないものをやるというのはとても難しい」とも言う。すぐに映画監督の黒沢明の言葉を参照しつつ、「全くゼロからイチを作ることはほぼできない。私も同じで、沢山見たもの、経験したもののの中から、その引き出しの中から、少しずつまだこういうやり方はみんなが見たことはないだろう、びっくりしてくれるかな、と思いながら、そこを目指して作っていく」と語ってくれた。

ここにあって4つ目を付け加えるならば、以上の林の道程に見られたように、様々なジャンルのものから、積極的に学ぶ姿勢を保持していくことになるだろう。

以上の林の話を敷衍すれば、現在の創作太鼓は、各地の伝統だけでなく、古今東西の文化を参照しながら、新しい太鼓の表現をいかに舞台上で展開できるのかが今後のカギとなってくる。さらに、その「新しさ」をまだ見ぬ観客たちにどれだけインパクトを与えられるのかが重要になろう。林の歩みを羅針盤に、何人もの冒険者たちが世界各地に出てくることを強く願い、一観客としてもそうした舞台を観劇できる機会がより多くなるよう期待したい。

なお、プレミアム・トークにおいても林は今回のトーク・セッションの内容に関わることを話しているので、こちらも参照されたい。具体的な太鼓曲の創作過程、独奏の成立、ストーリー性のある舞台の制作背景、太鼓の可能性、プロとしての太鼓打ちの条件など、いずれも学ぶところは多い。

2. アンケート調査の結果と分析について

WTC 開催時から 12 月 15 日までの 3 週間、Web を通じてアンケート調査を実施した。日本語版の回答者は 21 名、英語版は 33 名で、総計 54 名になる。ここでは日本語版と英語版に分けて、両者の回答を比較するような形でまとめていきたい。日本語版の回答者は海外在住者が多少いるものの、ほぼ日本国籍を有する者であり、英語版の回答者はほぼ外国籍であると考えられる。

1. 回答者の属性と太鼓との関わりについて

はじめに回答者の属性から検討しよう。表1と2にあるように、ジェンダー比率を見ると、日本語版では男性8人、女性12人で、英語版では男性9人、女性24人で、どちらも女性の比率の方が高く、かつ海外勢の方が比率はより高くなる。太鼓の打ち手に女性が多い傾向はよく指摘されるところであるが、ここでも同様の結果になった。

性別		
男性	8	(人)
女性	12	(人)
不明	1	(人)
現在の居住国		
日本	14	(人)
アメリカ合衆国	3	(人)
オーストラリア	3	(人)
不明	1	(人)
年齢		
最年少	29	(歳)
最年長	63	(歳)
20代	2	(人)
30代	0	(人)
40代	5	(人)
50代	6	(人)
60歳以上	5	(人)
不明	3	(人)
平均	43.7	(歳)

表1 日本語版の回答者の属性表

性別		
男性	9	(人)
女性	24	(人)
現在の居住国		
United States	14	(人)
Australia	5	(人)
Canada	2	(人)
Spain	4	(人)
Hungary	3	(人)
England	2	(人)
Germany	1	(人)
Italy	1	(人)
Argentina	1	(人)
年齢		
最年少	29	(歳)
最年長	77	(歳)
20代	1	(人)
30代	9	(人)
40代	15	(人)
50代	2	(人)
60歳以上	2	(人)
不明	1	(人)
平均	41.2	(歳)

表2 英語版の回答者の属性表

現在の居住国に着目すると、多い順でアメリカが17人、日本15人、オーストラリア8人、スペイン4

人、カナダ、イングランドがそれぞれ 2 人、ドイツ、イタリア、アルゼンチンがそれぞれ 1 人である。日本語版の 6 人がアメリカとオーストラリアにいるため、このアンケートに回答を寄せてくれた日本在住者はわずかに 15 人とどまった。後述するが、こうした機会に熱心に参加するのは、海外勢であることはあらかじめ指摘されてよい。

次に年齢であるが、日本語版、英語版ともに平均年齢は 40 歳前半になる。日本語版は 43.7 歳で 40 歳代から 60 歳以上に集中しており、30 歳代がゼロであることは気になる点である。それに対し、英語版の海外勢は 30 歳代と 40 歳代に回答者が集中している。20 歳代の若者層の参加が少ないことが目立っている。

職業に関してはアート関連に従事する人が若干英語版の方が高い比率になっている。教育関連に就いている人たちは日本語版も英語版も同じくらいの比率になる。しかしながら、母数が少ないため、WTC 参加者の全体の傾向を反映しているかはわからなかった。

職業	
音楽・舞踊・イベント関連	4
会社員・公務員	4
保育・教育関連	4
技術職	3
自由業	2
主婦	2

表 3 日本語版の回答者の職業別人数

職業	
音楽・舞踊・演劇関連	8
研究・教育・医療関連	6
技術職	8
その他(会社員・公務員)	5
学生	1
回答なし	4

表 4 英語版の回答者の職業別人数

次に回答者と太鼓との関わりに注目しよう。出会った年代であるが、海外勢は 2000 年代と 2010 年代の割合が高く、それに比例して太鼓歴も 5 年から 19 年に集中する。どうやら出会ってからしばらくして太鼓を始めた人も若干いるらしい。対して日本側は太鼓歴 10 年から 20 年以上に集中する。

太鼓と出会った時期	
1970 年以前	1
1980 年代	2
1990 年代	4
2000 年代	3
2010 年以降	4
不明	7
太鼓歴	
1~4 年	3
5~9 年	3
10~19 年	8
20 年以上	6

表 5 日本語版の回答者の太鼓に出会った年代と太鼓歴

太鼓と出会った時期	
1970 年以前	1
1980 年代	1
1990 年代	6
2000 年代	10
2010 年以降	10
不明	5
太鼓歴	
1~4 年	1
5~9 年	13
10~19 年	15
20 年以上	3

表 6 英語版の回答者の太鼓に出会った年代と太鼓歴

では、どういった場所で太鼓に出会ったのだろうか。それを示したのが以下の表7と8である。海外勢の方が多様な媒介を通じて太鼓に出会っていることもあるが、それが必ずしも日本である必要はない。

太鼓と出会った場所	
東京	2
埼玉	1
三重	1
熊本	1
アメリカ	5
オーストラリア	2
不明	9
太鼓と出会った場所(媒介)	
ワークショップ・教室	3
地域イベント・祭・保存会	4
公演・フェス	3
不明	11

表7 日本語版の回答者の太鼓に出会った場所と媒介

太鼓と出会った場所	
USA	8
Japan	6
Australia	5
Spain	2
Hungary	2
Canada	1
UK	1
Argentina	1
不明	7
太鼓と出会った場所(媒介)	
公演・フェス・イベント	14
大学	4
ワークショップ・学校・文化センター	3

表8 英語版の回答者の太鼓に出会った場所と媒介

この傾向は以下の太鼓をはじめた場所にも当てはまる。

太鼓をはじめた場所	
日本	15
現在住んでいる国	5
不明	1

表9 はじめた場所(日本語版)

太鼓をはじめた場所	
日本	6
現在住んでいる国	26
その他	1

表10 はじめた場所(英語版)

ではなぜ太鼓を習い始めたのだろうか。回答欄のプルダウン形式の項目には①「体力をつける、維持する」、②「リフレッシュ(太鼓が楽しい)」、③「日本の文化を学ぶ」、④「その他(記入式)」とした。項目を選んだ人は日本語版では②のリフレッシュが10人、③が3人であったのに対し、英語版は①は2人、③は6人とどまる。両者とも残りは④「その他」で、海外勢の方がはじめた理由について3つの項目から選ぶだけでは言い尽くせないものがあつたようである。

記入されたその動機をまとめると、力強い太鼓の音に魅かれて、学校でやっていた太鼓に新鮮なものを感じて、太鼓の演奏を見てエネルギーを感じて、ただ太鼓を聞くだけでなく、実際にたたきたかった、自分とすべてを結びつける太鼓の本質を知りたくて、たたいてみて楽しかった、単純に和太鼓に興味があつた、日本に行きたかった、友人に誘われて、友達を作りたかった、リズムと動きの面白さ、ダンスとドラムをやっていてその両方を可能にしてくれるから、自分の心に太鼓が訴えかけるものがあつた、その芸術的表現に魅かれて、などである。

日本語版では和太鼓の曲でダンスを踊ってみて心地よかったので、やり続けていた演劇をやめた後に生じたストレスを発散するため、さまざまな音楽を知りたかったので、演奏を見るだけの和太鼓からシンプルなりズムと動きの三宅太鼓を知って、ただただやってみたくて、障がいのある娘と仲間達に太鼓を始めさせたく、実際に自分も太鼓を知る必要があったので、という動機が記入されていた。地元の祭りの太鼓チームに無理やり勧誘されたことを動機に挙げているのは、日本でしか見られない回答である。

次にどのような団体に太鼓を練習し、週あたりの練習時間に聞いてみたアンケートの結果は以下のようになる。この質問は太鼓の多様な関わりを前提とするものであるが、所属団体と活動内容によって分類することが難しく、結果、多様な形態で練習する海外勢に「その他」が多く含まれてしまった。練習時間については海外勢の方が長いことが明らかになった。

練習団体の形式	
太鼓グループ	11
太鼓教室	5
地元の伝統保存会	2
その他	2
不明	1
練習時間(コロナ前、週あたり)	
1時間未満	2
1-2時間	5
3-4時間	4
5-6時間	6
7時間以上	3

表 12 所属団体の形態と練習時間(日本語版)

練習団体の形式	
太鼓グループ	14
太鼓教室	5
学校の部活動	1
その他	13
練習時間(コロナ前、週あたり)	
1時間未満	1
1-2時間	5
3-4時間	9
5-6時間	8
7時間以上	10

表 13 所属団体の形態と練習時間(英語版)

所属団体の交流について、国内と海外との関係を示したのが以下の表である。日本も海外とも他の団体の交流は比較的行われているようであるが、海外演奏の機会は海外勢の方が多い。

他団体との交流	
ある	17
ない	3
不明	1
海外演奏への参加	
ある	8
ない	12

表 14 他団体との交流と海外での演奏参加(日本語版)

他団体との交流	
ある	24
ない	9
不明	
海外演奏への参加	
ある	20
ない	13

表 15 他団体との交流と海外での演奏参加(英語版)

2. WTC について

続いて WTC に関する質問を行った。まず、WTC の開催を何で知ったのかについては、表 16 のように日本側は友人や知り合いからが多い。英語版は表 17 にあるよう、複数回答になってしまったが、その情報元は複数あったようである。「その他」には知り合いの名前や 2017 年くらいからヨーロッパ太鼓カンファレンスなどの太鼓の集まりで、事前の開催アナウンスがあったことが複数記されていた。

今回の WTC 開催はどのように知ったか	(人)
友人や知り合いから	13
SNS から	7
WTC Web サイト	0
その他	1

表 16 開催情報元(日本語版) 複数回答なし

今回の WTC 開催はどのように知ったか	(人)
友人や知り合いから	13
SNS から	17
WTC Web サイト	21
その他	12

表 17 開催情報元(英語版) 複数回答あり

今回の WTC の企画について、映像の視聴数、その中で面白かった企画について質問した結果が以下の表 18, 19, 20, 21 になる。

視聴・参加企画数(全9本中)	(人)
1 本	3
2~3 本	2
4~5 本	4
6~7 本	5
8 本	4
9 本	2
不明	1
平均	5.2

表 18 視聴企画数(日本語版)

視聴・参加企画数(全9本中)	(人)
1 本	1
2~3 本	6
4~5 本	5
6~7 本	13
8 本	7
9 本	1
平均	5.8

表 19 視聴企画数(英語版)

最も面白かった企画	(人)
プレミアム動画:	6
トピック 1	6
トピック 2	2
トピック 3- LOCAL	1
トピック 3- GLOBAL	1
一般投稿動画	2
浅草太鼓祭り	1
スペシャル・ライブ・トーク	1
不明	1

表 20 最も面白かった企画(日本語版)

最も面白かった企画	(人)
プレミアム動画:	10
トピック 1	5
トピック 2	5
トピック 3- LOCAL	1
トピック 3- GLOBAL	1
一般投稿動画	6
スペシャル・ライブ・トーク	2
Taiko Documentaries	2
不明	1

表 21 視聴企画数(英語版)

改善点や要望については記入式とした。その代表的なものを日本語版、英語版の順で、要約して以下に挙げる。

通訳が間に挟むため、もっとセッションの時間を長くした方がいいのでは。
トピック3のグローバルはもっと多様な見方を広げて欲しかった。トピック1は、スタイルもキャラクターも多様なメンバーがお互いに敬意と関心を持って話し合っていた。山部さんが提案されていた太鼓のルーツやシーンを体系的に学べる文字ベースの資料も期待したい。
Zoom より翻訳機能がついた Google meet を使ってみてはどうか？
あえて欲をいえば、時間からすると人数がちょっと多かったかも。今回は PC などで閲覧だったので、もう少し一人一人の話をじっくり聞きたかった。
東京都支部・太鼓セミナーの中止の告知が直前過ぎた。緊急事態発生なので中止自体はやむをえないが、内部で決定したら早急に知らせて頂きたかった。トークライブだけでも、見応え聴き応えがあったので、コロナ収束まではオンラインを活用してほしい。
企画は配信期間内に全部、ゆっくり楽しみたい。多すぎて鑑賞できないかも。
以前からの付き合いのない太鼓チームや私たちのような素人の参加、さらに動画を投稿しにくい印象。 Australia では大きいイベントでもこれと同じ Google フォームを使った一般へのボランティアやアーティストのアプリケーションフォームが広く一般に用意されていてダメ元でも出してみようと言う気持ちになる。次回、もし日本でカンファレンスが行われるのであれば、一般 WS 参加者への簡単な日常の英語サポート・ボランティアとして参加したい。
視聴率が思ったより低かった。原因を究明してほしい。宣伝活動にもっと力を入れるべきでは。

以上、日本語版(抜粋・要約あり)

コンテンツが多いので、個々の関心に沿って順番に見ていけるような見取り図のようなものがあるとわかりやすかった。
次回もオンラインでの中継を続けてほしい。 WTC 後も世界中の太鼓仲間とインターネットで繋がれるようにできるといい。
ネットでやるのであれば、世界の太鼓仲間と交流できるコンテンツが欲しかった。 Facebook のイベントの案内が実際と違っていた。 Web サイトの案内をもっと簡潔にしてほしい。
ライブ・トーク・セッションの前に自然発生的に何人かと Zoom で集まっていたのだけれど、そうした集まりが WTC にあってもいいのではないか。
もっと早くに WTC を開催するのかもしれないのか、知らせてほしかった。
ライブ・トークでは聞く内容も多く、集中するのが難しかったので、途中休憩があってもよかった。みんなでストレッチしたりするのもいいかも。
より多くの和太鼓グループに参加してもらうために、地域別に紹介できるホスティング・サイトに変えてみては。
時差もあってライブ・トークの時間は辛いものがあるので、途中休憩を入れてほしい。
ライブストリーミングや YouTube に慣れていない人たちのために Web サイトにヘルプセクションがあってもよかった。
プレミアム・トークについて議論する場も欲しかった。

セッションでは質問と答えを一つ一つ翻訳する必要があるため、関心を持ち続けるのが難しい。
日本のローカル・グループのコンテンツをもっと増やしてほしい。日本の視聴者が WTC を楽しんでくれることで、次回は日本の団体がもっと参加してくれることを期待。
ライブ・トーク・セッションを 2 部構成にして、合わせて 3 時間にした方がより深く議論できたのでは。
女性だけのセッション、太鼓職人、また太鼓を通じた文化の違いに関するセッションもあってもよかったかも。聞いている側も誰でも参加し、話し合えるような Zoom などの場が欲しかった。
このイベントが私のように地域から孤立して活動している個人が集まれるようになることを希望する。

以上、英語版より(抜粋・意訳あり)

3. 次回の WTC について

最後に、コロナ収束後に WTC が日本で開催される場合について質問した結果は以下の表 22、23 のようになるが、日本勢と海外勢ともにその参加希望は強いことがわかる。だれと来たいかについては、太鼓仲間が多数を占めた。太鼓を好きな者同士で、気兼ねなく楽しみたい傾向が読み取れる。多少意外だったのは、日本勢と海外勢ともに、伝統芸能として伝わる地方の太鼓についても積極的に学びに行きたいとする要望である。この点は北米やヨーロッパのカンファレンス形式の集まりにはない、日本独自の特色ある企画に十分なりうるものである。

日本で WTC が開かれるとしたら参加したいですか？	
大いにそうしたい	17
まあまあ	4
その場合、だれと来たいですか？	
太鼓仲間	18
家族	2
それ以外の友人	1
WTC と連動して、もし地方各地で太鼓に触れる機会があれば参加したいですか	
はい	21
いいえ	0

表 22 次回の WTC の参加希望(日本語版)

日本で WTC が開かれるとしたら参加したいですか？	
大いにそうしたい	30
まあまあ	4
その場合、だれと来たいですか？	
太鼓仲間	31
家族	1
それ以外の友人	1
WTC と連動して、もし地方各地で太鼓に触れる機会があれば参加したいですか	
はい	32
いいえ	1

表 23 次回の WTC の参加希望(英語版)

3. 全体の総括

杉本浄

最後に、全体を総括していきたい。今回の WTC の評価したい点は以下の4点にまとめられよう。

①現在の Covid-19 が蔓延する様々な制限の中で、開催期間直前まで最大限の可能性を模索した点はまず評価できよう。直前までバタついたものの、映像およびウェブ中心のカンファレンスに切り替えたことは、この条件下では大変効果的であった。

②「太鼓のハナシ」や楽曲提供の募集など、太鼓が世界でどのように演奏され、その活動はどういったものであるのか、さらにどんな演奏をしているのかを、映像を通して知ることができたこと。集まった映像もバラエティーがあり、もっと知りたいと思わせるものもあった。参考までに投稿本数と投稿者の国の数を紹介すると、「太鼓のハナシ」:84 件(内 38 件は Taiko Community Alliance の Taikothon より)、寄せられた楽曲 25 件、一般投稿動画の合計 109 件になる。参加国は合計16の国と地域で、日本、アメリカ、アルゼンチン、イギリス(イングランド、ウェールズ、北アイルランド、スコットランド)、イタリア、インドネシア、オーストラリア、スペイン、ドイツ、ニュージーランド、ハンガリー、ブラジル、ベルギーだった(なお、これらの投稿された映像は、WTC を通してアップされたコンテンツと同様に、今後のリソースとして YouTube 上でアーカイブできる)。

③映像については、これまでの世界各地における太鼓文化の展開が、それを担ってきた当事者から直に語られた証言集のようになっており、これまでの太鼓の歩みをきちんと理解できるものだった。一見バラバラのようであるが、何かしら繋がりをもって太鼓が展開してきたことを感じさせる。ともかく、事前に準備された映像は多量であり、どれも保存資料として残すに耐えうる質を有している。また 2 本の太鼓ドキュメンタリー・フィルムもこうした理解を深めるものだった。実行委員の側で初めて日本語の字幕が付けられた『BIG DRUM(ビッグ ドラム):アメリカの太鼓』は日系人太鼓の発展の証言集でもあるが、日本側にぜひとも見てもらいたいものである。今回ストックされた映像は、現代和太鼓の展開を学ぶ教材を纏まって提供してくれるものでもある。

④最後に太鼓の良さを知ってほしいとする実行委員会側の強い思いが前面に出ている点を挙げたい。太鼓はまだまだその良さが伝わっていないとする歯がゆい気持ちも垣間見えるが、こうした積極性が次に繋がることを予感させる。

課題としては以下3点のことが、このレポートを通じて見えてきた。

①参加者数についてはウェブによる開催であるため確たるカウントができず、評価をしがたいところがある。参考までに 2020 年 12 月 6 日時点の「YouTube チャンネル アナリティクス」を紹介すると、チャンネル登録者数は 475 人、全体の視聴回数は 25,507 回であった。その後、2021 年 1 月 25 日時点では、それぞれ 510 人、33,372 回と増加している。今後もこれらの数は、着実に増加していくと予想される。また、12 月 6 日時点の視聴回数の多い企画を上位3位まで順に並べると、オープニング・セッションとそれに続くライブ・トーク・セッションのトピック3:グローバルが 2,236 回、トピック1が 1,408 回、トピック3:ローカルが 1,218 回になった。1 月 25 日ではそれぞれ、2,350 回、1,500 回、1,277 回でそれほど視聴数が伸

びているわけではないが、目立ったのは WTC テーマ曲や投稿楽曲へのアクセスが堅調に増加していることである。実際の太鼓の練習にこれらの楽曲が取り入れられていると予想される。後述するが、今後も視聴数を増やしていく工夫が何かしら必要かもしれない。なお、動画へのトラフィックソース(流入元)は Facebook や WTC のホームページからが多く、それぞれ全体の視聴回数の3割強と3割弱だったことを考えると、これらを更新することで視聴者数は着実に伸びていくだろう。

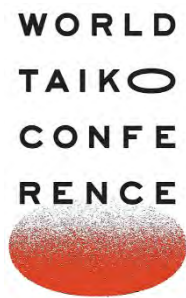
②上とかかわることであるが、参加者の広がりについては、今回は既存の太鼓の繋がりがある者同士が集まった感はぬぐえない。ライブ・トーク・セッション中のチャット欄を見るとその傾向が明らかだった。アンケートにも出されていたが、期間中にウェブ参加者たちが気軽に交流できるようなチャットや会議システムなどを導入するような工夫は必要だったのかもしれない。初回なので致し方ない面があるが、WTC 運営側のコネクションが強い印象を受けた。WTC のチラシが言う「このイベントをきっかけに世界に太鼓仲間を増やしましょう」は今後とも目標にしたいところである。

③せっかく収録した貴重な映像であるが、太鼓に打ち込む人たちのために、さらに整理してアーカイブ化できないだろうか。手っ取り早くは、3つ、ないし4つのトピックに沿った形で再編集するとよいかも。また、一部は文字化した方がよいトークもあった。今後の映像資料の利用拡大のためにも、ぜひともやっていただきたい。

以上、課題を指摘したが、今回の記念すべき日本での初カンファレンスは、大いなる一歩になったことは間違いない。映像を通じて、太鼓の可能性が余すことなく現れていたように思われる。口唱歌で伝えられる「ドンドコ」はもはや世界の共通語になった。アンケート調査でもほとんどの国内外の参加者が、次回開催を期待しており、地方への太鼓の旅についてもほとんどが希望している。太鼓はその場で一緒にたたくのが何より楽しい。ぜひ実現してもらいたい。

【参考文献一覧】

- 上野千鶴子 1987 「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編『現代日本における伝統と変容 3 日本人の人間観』ドメス出版、pp. 226-243.
- 呉屋淳子 2017 『「学校芸能」の民族誌: 創造される八重山芸能』森話社.
- スモール、クリストファー 2011 『ミュージッキング: 音楽は“行為”である』(野澤豊一他訳)水声社.
- 寺澤洋子(他) 2013 「身体機能の統合による音楽情動コミュニケーションモデル」『Cognitive Studies』20(1), pp. 112-129.
- 中村美垂 2013 『音楽をひらく: アート・ケア・文化のトリロジー』水声社.
- 名和克郎 2020 「境界、動作、リズム——ビヤンス及び周辺地域の「太鼓演奏」の諸相」西井涼子・箭内匡編『アフェクトゥス——生の外側に触れる』京都大学学術出版会、pp.243-274.
- Bauman, Richard 2008 “The Philology of the Vernacular”, *Journal of Folklore Research*, 45(1), pp. 29-36.
- Konagaya, Hideyo 2001 ‘Taiko as Performance: Creating Japanese American Traditions’, *The Japanese Journal of American Studies*, 12, pp.105-124.



World Taiko Conference 2020 Survey Report

Edited by Kiyoshi Sugimoto

Fumiko Kobayashi, Takayoshi Ishino, Saki Nabekura

Takehisa Kadota, Kodai Konishi

February 28, 2021

©World Taiko Conference Committee

Organizer: World Taiko Conference Executive Steering Committee

Cooperation: Nippon Taiko Foundation

Grant Assistance: The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2020, Arts Council Tokyo

Sponsors: Asano Taiko, Miyamoto Unosuke Shoten, Shinobue Rippei, House Foods Group Inc., Roland, Miura Taiko Ten



文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan



令和2年度日本博
イノベーション型プロジェクト



食でつなぐ、人と笑顔を。



Roland

三浦太鼓店

List of Contributors

Fumiko Kobayashi is a master's student in Pedagogy, Tokyo Gakugei University.
Takayoshi Ishino is a Ph. D. Candidate in Cultural Anthropology, Rikkyo University.
Saki Nabekura is a Ph.D. Candidate in Sociology, Rikkyo University.

Kiyoshi Sugimoto is Associate Professor of Asian Studies in History, Tokai University.

Takehisa Kadota is Associate Professor in Cultural Anthropology and Folkloristics, Rikkyo University.

Kodai Konishi is Associate Professor in Social Anthropology, Tokyo Gakugei University.

Contents

Introduction	Kiyoshi Sugimoto	1
List of WTC Events		2
1. About the Live Talk Sessions		
Topic 1: Taiko as an Expression on Stage: Its Development and Future <i>Sousaku</i> -Taiko as an Expression of Diverse Individuality	Fumiko Kobayashi	3
Topic 2: Taiko and Accessibility: How Inclusion Connects Communities Opening of the Mind and Body	Kiyoshi Sugimoto	5
Topic 3: The Value of Taiko in Diverse Societies Toward a Taiko Community that Resonates in Diversity	Takayoshi Ishino	7
Topic 3: The Value of Taiko for Community Building “Chosen Connections” and the Polyphonic Taiko Community	Saki Nabekura	9
Comments on the Live Talk Sessions Wadaiko as a Global Vernacular	Takehisa Kadota	12
Potential of Taiko to Embody a “Shared” World	Kodai Konishi	13
Special Live Talk The Starting Point of Creation through Taiko, and Taiko as a Performing Art	Kiyoshi Sugimoto	14
2. The Questionnaire: Results and Analysis	Kiyoshi Sugimoto & Fumiko Kobayashi	16
3. Overall summary	Kiyoshi Sugimoto	23
List of References		24

Introduction

Kiyoshi Sugimoto

The 2020 edition of the World Taiko Conference (hereinafter, WTC) was held for the first time in Japan as a two-day event from November 21–22, 2020. The original plan was scaled down due to the global spread of the COVID-19 pandemic, and some related events were canceled at the last minute. Ultimately, the conference was held online.

The earlier editions of this type of “taiko conference” were organized in North America (starting in 1997) as well as Europe (starting in 2016). Such taiko exchanges in a conference format usually take place in hired venues where all the participants gather, with instructors conducting workshops and lecture demonstrations on the taiko. These taiko gatherings that host many participants serve as a place for socialization. These events have been held to accommodate the establishment of taiko groups in specific areas, which has necessitated information exchange regarding taiko drumming techniques, instructions, and relevant equipment. As conferences have been continuously held to date, it appears that the pleasure of acquainting with others has become a defining feature. In any case, there is no doubt that a conference format is a form of taiko-mediated exchange that would not have taken place in Japan.

It is believed that the current version of *kumi-daiko* or *sousaku-taiko*, which refers to an ensemble with taiko at its center, started in Japan about fifty or even seventy years ago.¹ For the first time, the World Taiko Conference was held in Japan, the country where the taiko movement first emerged. I will not detail the history, but the fact that Japan had to import the conference format developed in North America and Europe is a telling reflection of the current circumstances of “taiko”.

For details about the WTC program and events, please refer to the list on the next page or the website. Here, I present an outline of films that were shown at the WTC. A number of videos were shown as Premium Talks on the three themes announced before the event; a video about Eitetsu Hayashi, a pioneer in the field; a video on the WTC theme song rendered by Eitetsu; “Eternal SONG: It Is ‘HAYASHI’,” a collection of submissions from across the world; a shared library of the participants’ own compositions; and two documentary films that were released for a limited period. Regrettably, the taiko concerts and workshops planned for the conference were canceled at the last minute.

This survey report has also changed significantly from the original plan. It now summarizes four live talk sessions on three topics that were streamed on the conference day, adding my own commentary. I also asked two researchers to comment on the talk sessions. I conducted an online questionnaire survey, starting from the conference date until December 15, 2020, and this report summarizes the findings. Finally, the report discusses the conference completely based on the above information.

¹ There is no consensus on when *kumi-daiko* or *sousaku-taiko* started. Some argue that it started about 50 years ago, as they emphasize that the performance of this style received widespread acclaim after the 1964 Tokyo Olympics. Some say 70 years ago, since they focus on the emergence of the style itself.

List of WTC Events

●Pre-WTC Events

- WTC Premium Talks, WTC Special Lecture by Eitetsu Hayashi, Taiko Community Video Forum, WTC Theme Song, Taiko Composition Library, Taiko Films, Taiko Event Information.
- Partnered Events (with Nippon Taiko Foundation) : 22nd National Challenged Taiko Festival (Oct. 4, Canceled), 4th Asakusa Taiko Festival (Nov. 3).

○Events during the WTC period

Nov. 21 (Sat):

- 14:45-15:00 WTC Opening Remarks
- 15:00-16:30 Live TALK Session 1 :
Topic 3: [Taiko and Community] <GLOBAL> The Value of Taiko in Diverse Societies
- 19:30-21:00 Live TALK Session 2
Topic 3: [Taiko and Community] <LOCAL> The Value of Taiko in Community Building

Nov. 22 (Sun):

- 9:00-10:30 Live TALK Session 3
Topic 1: [Taiko as a Performing Art] Taiko as an Expression on Stage: Its Development and Future
- 12:30-14:00 Live TALK Session 4
Topic 2: [Taiko and Inclusivity] Taiko and Accessibility: How Inclusion Connects Communities
About the WTC Theme Song
- 16:00-17:00 Special Live Talk with Eitetsu Hayashi:
- 17:00-17:15 WTC Closing Remarks

- Partnered Events (with Nippon Taiko Foundation and its Tokyo Branch) : 24th Japan Taiko Charity Concert (Nov. 23, Canceled), Nippon Taiko Foundation (Tokyo Branch) Workshops (Nov. 22 and 23, Canceled)

◇Others

- Featured taiko documentaries:
“TAIKO FILM” (streamed free of charge from Nov. 7 - Nov. 22)- Introducing the charm of taiko around the world.
“BIG DRUM: Taiko in the United States” (streamed with Japanese subtitles from Nov. 11~)- A documentary on America’s taiko pioneers and the ongoing transformation of this dynamic performing art. Japanese subtitles were created through the efforts of WTC.
- WTC Crowdfunding Campaign, WTC T-shirt

1. Live Talk Sessions

Topic 1: Taiko as a Performing Art Taiko as an Expression on Stage: Its Development and Future *Sousaku-Taiko* as an Expression of Diverse Individuality

Fumiko Kobayashi

This session discussed taiko as a performing art with reference to its energy and sound, life and language with *kuchishouga* (sung rhythms), influence from other fields, and female expression. The panelists were Chieko Kojima (Niigata Prefecture/Kodo Taiko Performing Arts Ensemble); Kenny Endo (Hawaii, USA/Kenny Endo Taiko Ensemble); Taishi Yamabe (Tokyo/solo artist); and Kaoly Asano (Tokyo/Gocoo), with Yoshihiko Miyamoto (Tokyo/Miyamoto Unosuke Shoten) as the facilitator.

It has been half a century since taiko evolved and began to be gradually performed on stage. However, as a performing art, taiko is still young and is not fully recognized as an art form. Therefore, one of the challenges has been to build its social status. Meanwhile, an advantage of *sousaku-taiko* is its diverse expression. The discussion examined how to sublimate energy emanating from taiko, while focusing on its diversity.

Taiko requires a strong sound, and “hammering in” (*uchi-komu*) with energy is its signature expression. However, to achieve a level of sensitivity that is considered music, small sounds are also necessary. Yamabe recalled when various amateur groups started to perform that “hammering in” meant “to produce loud sounds,” and he argued that this understanding must change. Kenny Endo reported that he (Yamabe) “knows what a good taiko sound is” when he witnessed Yamabe’s performance at a competition, where he served as one of the judges. The panel concluded that it is important to have “sounds with various feelings that create emotional responses.” As for taiko’s sound, Kojima said “I like a gentle sound coming from the taiko.”

Each panelist shared his/her experiences about life, language, and its relationship to *kuchishouga*. The *kuchishouga* used in oral instruction of taiko reflect the nuances of the language used by people living in the locality and are closely related to subtle expressions of taiko.

Drawing from his experience of rice planting, Yamabe commented on the relationship between soil hardness and the rhythm of rice planting songs. As soil hardness differs between the coastal and mountainous areas within one prefecture—Okayama Prefecture—rice planting practices also vary within the prefecture. Naturally, the rhythm of rice planting songs differs. This is a very interesting point of being able to understand the context of music formation by experiencing life in the locality under consideration. Endo, hailing from America, argued that correct singing and pronunciation are important while learning traditional Japanese music. He added that it would help if one knew the language in this regard. In contrast, Miyamoto suggested that with the spread of taiko across different languages, new expressions could emerge. Asano said it was important for her to sing when playing taiko, and pointed out that there is something universal that transcends linguistic barriers when transforming voice drawn from the bottom of one’s heart into the sound of taiko.

Kojima told the panel about her experiences of learning local folk art via oral instructions when she was told she is “doing it wrong” because she “does not speak the dialect” even though she was able to imitate the rhythm. She also cited the example that “ice cream” and “banana” are pronounced with a different intonation in Japan and a foreign country and suggested that there is a relationship between language and rhythm. Endo proposed that one cannot learn about “*ma* (pause)” and “*nori* (spirit/energy)” unless through singing, and added that while this is inconvenient for foreigners, once one has mastered the song, it would serve as an important element in the composition. Songs are not simply lines of characters; they enable one to communicate subtle feelings such as the unique “*ma*” and “*nori*” contained in the expression of sound that is rooted deeply in communal life. Moreover, mastering “*ma*” and “*nori*” contributes toward expanding the range of one’s expression in *sousaku-taiko*.

As for what influenced the panelists other than taiko, Kojima mentioned Japanese traditional dance,

while Endo mentioned jazz, rock, and Latin music. Furthermore, Endo commented that the key to global collaboration among artists is the willingness to learn from each other without compromising on each other's art style, while discarding unnecessary prejudice.

Yamabe said that he had grown up observing *sousaku-taiko*, but as he was not bound by any relationship with a teacher who does not allow students to venture outside the scope of their own learning, he was able to explore other fields as he liked. At the same time, Yamabe was alarmed by people who engaged in *sousaku-taiko* without understanding its origins and asserted the need for opportunities to systematically learn about the people and history that had influenced *sousaku-taiko*.

Finally, Miyamoto asked Kojima and Asano to express their views on taiko from a woman's perspective. Asano said Gocoo, the group she leads, encourages men and women to naturally create music together. Kojima was once denied the opportunity to play taiko on stage just because she is a woman, which she said inspired her work on women's expression. She believes that ideally there should be no separation between men and women, and performing arts that are similar to taiko have the potential to contribute toward world peace by realizing this ideal.

Miyamoto concluded the session with the comment, "I hope that taiko enthusiasts worldwide can express their individuality through their technique."

Let me reflect on the talk session summarized above with reference to my specialism—music education—as well as insights into cultural policies.

At the beginning of the session, a question was posed regarding what is required for taiko as a performing art to build social status. The subtitle "Its Development and Future" suggests the basic stance of the session that a path to the future may be found in taiko's development, and the prospect of building social status through further development.

During the discussion, it was pointed out that for taiko to develop as a performing art in the future, a key point is that the expression through taiko is based on drumming with one's feelings and energy; individuality and diversity are important, as well as being creative and discarding unnecessary prejudice. These are core arguments for policies to pursue performing arts. However, detailed discussions in this session were limited to expressive methods such as tone and rhythm, so we need to further discuss composition, including composing a piece and improvisation.

Moreover, the panelists are highly acclaimed taiko drummers with their own established style. Therefore, the discussion focused on the performer's perspective regarding taiko expression. In response to the question posed at the beginning, we can think of the following concrete measures as examples:

To deepen understanding of the songs and demonstrate the breadth and depth of expression based on tradition.

To learn about different genres and schools without compromising one's attitudes toward the art.

To form a general understanding about "*sousaku-taiko*" by summarizing its historical development.

To realize these measures, we need to develop archives that transcend individual activities and communication. The contents presented at the WTC, which was conducted online this year, may serve as the beginning of such efforts.

Topic 2: Taiko and Accessibility: How Inclusion connects communities Opening of the Mind and Body

Kiyoshi Sugimoto

This was a discussion session among clinicians and practitioners about the effectiveness of taiko as part of developmental support for persons with disabilities, as a treatment for intractable diseases, and for maintaining health and prevention of dementia in the elderly. The panel comprised Yeeman Mui (ManMan) (California, U.S.A./Taiko Together), Atsushi Sugano (Niigata Prefecture/Kodo Cultural Foundation), Peter Hewitt (U.K./CCS Taiko), and Tsuyoshi Yamauchi (Shizuoka Prefecture/Fugaku kai), with Sydney Shiroyama (California, U.S.A./TaikoIN⁷) as the facilitator.

The first half of the session was devoted to introducing each panelist and their activities; this was delivered in a creative way. As the panel comprised persons whom Sydney Shiroyama, the facilitator and an occupational therapist, met while she was seeking taiko programs for patients with Parkinson's disease, the panelists were introduced as she retraced her journey of encounters and learning. Following the introduction, the panelists presented concrete details on how they conduct workshops and run classes for participants. Due to space constraints, I summarize below details of panelists' presentations without following the session order.

Yamauchi, who runs a social welfare organization called Fugaku kai in Shizuoka Prefecture and specializes in physical education for children with disabilities, has been using taiko as part of these children's care for the past 45 years. At the beginning, taiko drumming was an extra-curricular activity for the home care of persons with disabilities, but after it was implemented, children became engaged in it, and clear physical and mental changes were observed. For example, a child with autistic spectrum disorder learned to communicate with others through taiko drumming. Owing to these results, Yamauchi began to believe that taiko drumming could be an effective therapy and developed a taiko program, which he has been pursuing.

With taiko, anyone can produce sound as soon as they hold drumsticks in their hands. People with learning disabilities, even those who cannot read sheet music, can memorize the beats when the rhythm is taught orally. Moreover, it is more fun to drum with others than alone. One of the positive aspects of taiko drumming is that while it has a musical element to it, anyone can join in and enjoy it. Another positive aspect is that it allows the drummer to experience tremendous joy or satisfaction using his/her energy. Persons with disabilities often find it challenging to participate in sports due to high physical and cognitive expectations, but taiko drumming is free of such constraints. Anyone can break into a sweat by playing the taiko with their strength. Yamauchi emphasized that in his taiko therapy, the primary goal is not "to learn how to play the taiko" but "to learn with the taiko" both mentally and physically.

Peter Hewitt, who had discovered taiko about ten years ago in Gloucester, the United Kingdom (UK), taught himself taiko drumming from textbooks. When he had an opportunity to teach children taiko in a special support class once a week, he immediately realized that it could have beneficial effects. For example, a girl who had never spoken before cried out "*so-re*" after the workshop. Subsequently, she was able to speak many words. Since then, Hewitt has purchased a set of taiko drums and has been holding workshops for children, including those with disabilities.

Hewitt's best tip while teaching autistic children is emphasizing the fun aspect of taiko drumming and building expectations before letting them start playing. First, he allows children to observe the taiko and touch the drumsticks. Later, he lets them start drumming after spending a lot of time motivating them to drum. This enables them to encounter fantastic sounds that they did not expect. Moreover, he lets both children with and without disabilities engage in games using taiko. Adults also enjoy playing along with the children, recalling their childhood. Later, in a game of repetition, the instructor first drums a specific rhythm and the participants repeat it. Next, he asks the participants to create their own rhythm and everyone repeats it. As they engage in this activity, participants' confidence levels improve and they become more forthcoming in taiko drumming. At the end of the activity, a game to guess the tune produced by taiko drumming brings the participants to the climax. Some autistic children cannot endure sound because they are very sensitive to it. However, as taiko

drumming leads to a systematic space, children can engage in the collective activity by playing the taiko. Hewitt argued that taiko is effective also in this respect.

Yeeman Mui, originally from Hong Kong, is now based in Los Angeles after spending time in Hawaii. She learned taiko drumming as a fellow at the Taiko Center of the Pacific in Hawaii under the tutelage of Kenny and Chizuko Endo. She started teaching taiko from 2013 and, along with her family, she has also started a program for children aged two and above. This program is based on Balinese music and culture: everything is connected and everything supports each other. She also bases her teaching on Orff's approach to music education. In her program, she uses body percussion, songs, games, dance, chanting, visual art, storytelling, and taiko.

What is important in holding a taiko class, regardless of the circumstances, is to build trust with the participants. She said that if the class is relaxed, it would enhance both concentration and creativity. She also explained that you can teach taiko to 30 to 50 participants for about 20 to 30 minutes without speaking a word. This approach is very effective when teaching participants who speak different languages. She said she is mindful of placing the participants at the center of the workshop. For example, she would take ideas from the participants and let herself go with the flow as an instructor. She also claims that when an instructor fully and sincerely enjoys taiko, the participants always experience the same feeling.

Sugano, who joined Kodo as an administrator, introduced "Exadon," a wellness program that involves taiko. The Kodo Cultural Foundation initiated "Exadon" with Sado City in 2014, and was developed in collaboration with doctors and taiko instructors. He reported not only about the program's content but also the findings of an empirical study regarding the impact of the program on elderly participants. The study involved two groups of 15 people (75 years old on average); one group was asked to participate in a taiko activity every week for about two months, while the other did not play taiko. The taiko-playing group showed effects on all five indicators that measure positivity. For the elderly, the most serious problem is not an unhealthy lifestyle but isolation; therefore, improved social connections through "Exadon" improves positivity, which in turn contributes to health and longevity. Sugano told the panel that they were planning to expand the range of participants in the program, from the elderly to a wider range of age groups.

As seen above, taiko is a magical musical instrument that helps not only children, adults, and older adults with some disabilities, intractable diseases, or physical problems, but also able-bodied people in terms of developing proactivity, collaboration, concentration, and joy. It exerts a positive influence not only on participants but also on instructors.

In summary, taiko has the effect of drawing out and materializing latent power from individuals. Endogenous energy is released through physical movements, shouting, rhythm, vibrations, and the inner self that is hidden at the bottom of one's heart is also brought to light. This way, taiko enables drummers to engage with others and develop collaborative skills. By continuing to drum, they also develop their physical strength and endurance. All of this is enabled by the feeling of joy when playing taiko. It is when such an environment is created that taiko becomes an effective tool for care, cure, prevention, and maintenance.

The session showed taiko's vast possibilities. However, we realize that in terms of its use in society and recognition, taiko is still at the initial stage. Moreover, as Sugano pointed out, there is not much scientific or medical empirical data on taiko's effectiveness. As such, I recommend the creation of a platform where the panelists' rich experiences of giving instructions are collected and utilized. This type of platform may further enhance interactions between instructors, teaching and training young people as next-generation instructors, and accumulation and publication of data on the effectiveness of taiko.

Topic 3: The Value of Taiko in Diverse Societies Toward a Taiko Community that Resonates in Diversity

Takayoshi Ishino

As the number of taiko players increases globally, and views about taiko continue to diversify, what are the core values that are commonly associated with taiko? In addition, while diverse taiko groups and communities are emerging, is it possible to learn taiko together and share such values? These questions were discussed, and various opinions were exchanged in the live talk session entitled, “The Value of Taiko in Diverse Societies.” The panel comprised Tadashi Hasegawa (Ooita Prefecture/Yufuin Genryu Taiko), Derek Oye (California, U.S.A./Taiko Community Alliance), Jonathan Kirby (U.K./European Taiko Conference, Kagemusha Taiko), Lucas Muraguchi (Brazil/Isshin Daiko), and Miaochum Wang (Taiwan/Taiwan Taiko Foundation), with Roy Hirabayashi (California, U.S.A./San Jose Taiko) as the facilitator.

First, the panelists reported on the taiko groups existing in various countries. Today, people play taiko for a variety of values, reasons, and styles: as a form of education or musical activity and for promoting health or self-realization. Therefore, sharing these different values is the urgent question. For example, according to Jonathan Kirby, in Europe, only a small number of people play taiko to learn about “Japanese culture,” whereas most people see the value of keeping fit and in creating social connections through taiko. Consequently, he argued that it is more important to create more opportunities for communication and co-learning among individuals and groups than to identify certain common values to be placed at the core.

Even within a group, views on taiko may differ depending on gender and age, and it is a challenge to direct such differences constructively. In Japan, a one-way teacher–student relationships in which young people “steal” taiko drumming techniques from older members has been the norm. However, recently, the younger generation has been actively incorporating new elements into taiko drumming and expressing the tradition in new and innovative ways. Hasegawa reported that a more equal relationship is emerging in Japan, wherein the older members learn from younger members’ initiatives while teaching them history and techniques in return. We can also see the success of young taiko drummers in Brazil. According to Lucas Muraguchi, second- and third-generation Japanese Brazilians have emerged, and this younger generation is no longer interested in their roots as Japanese. Meanwhile, the taiko boom in Brazil, which began in the 2000s, has been gathering momentum among teenagers, who play taiko for pleasure and for learning about the Japanese culture. This indicates that taiko can contribute to the spread of Japanese culture in Brazil.

Aside from passing on the performing art’s roots and historical background, it is important to have a mechanism for people who do not share these roots and historical background and are yet to join such taiko communities. In this regard, Derek Oye introduced six basic values and principles of the Taiko Community Alliance, expanding on how they worked on the concepts of “respect” to others and “inclusion.” Building on the community developed by Japanese Americans, TCA has created digital programs to collect and share videos of individuals and groups that are involved with taiko communities in various ways. According to Derek Oye, this formed the basis whereby people of different nationalities, age groups, religion, and sexual orientation are included and accepted with mutual respect. In addition, for all those who wish to get involved in taiko drumming and learn through it, a variety of support, both internal and external, is necessary to sustain the community infrastructure. Miaochum Wang reported on support activities for children who cannot attend school for a variety of reasons to help them learn through taiko drumming, which confirms the importance of environmental support for individuals to pursue taiko activities.

The panel discussion confirmed the importance of sharing material with taiko groups with limited resources, using digital media such as videos and online video-sharing sites, and by creating opportunities for taiko groups worldwide to connect with each other across borders using online tools, as the next step for taiko’s development.

Now, I would like to review the talk session as an expert in cultural anthropology, focusing on three dimensions: “diversity,” “community,” and “images.”

First, the question at the top of the agenda of the talk session was how to build values that serve as shared “core” values. This appears to have been gradually relativized as the discussion progressed. In other words, rather than creating a community by defining unified values or roots for taiko and by applying them to diverse taiko groups, it was confirmed as important to loosely connect the various cultures and backgrounds fostered by individual taiko players and taiko groups while maintaining their diversity.

The idea of creating an open-ended community that accepts diversity and differences: are they not similar to taiko itself? Taiko performed by several players creates a sense of togetherness and excitement with its fervent sounds and rhythms that involve the audience. This, at the same time, reminds everyone that the performance is based on each taiko player’s precise technique and thought. To resonate by synchronizing rhythm and bodily movements while respecting each taiko player’s diversity—which is a “core” value—is what the discussion appeared to suggest as the spirit necessary to build solidarity among diverse taiko players and taiko groups.

The 2020 edition of WTC was held online due to the pandemic. It is important to understand that the event confirmed the potential of exchange between individuals and groups, using online tools and digital media. However, while there is no doubt that planning of online events and developing a database of visual material is necessary, we need to have further discussions on how each group can develop inspiring visual material. How can visual material convey taiko’s distinctiveness and the player’s physicality to the viewer? What kind of visual material enables the viewer to share a sense of taiko together and to understand each player’s background and story? We need to have opportunities to try various approaches in this regard and to share our experiences.

What is important to understand, is that a visual material has the potential to generate such physicality and a sense of resonance to the viewer. The anthropologist Katsuo Nawa analyzes the unique fever and groove that the Nepalese drum produces, based on audio–video performances that he filmed in Nepal. He says that after repeated viewings of videos of drumming, he experienced more clearly the special “fever” that was generated than when he filmed the performance (Nawa 2020). How can we create and communicate such arousing visual material? How are we going to link the process of producing such material to the transmission of legacy and opportunities for exchange? These are our future challenges.

Topic 3: The Value of Taiko for Community Building “Chosen Connections” and the Polyphonic Taiko Community

Saki Nabekura

This session discussed the relationship between local communities and taiko in Japan, particularly focusing on the preservation of local folk art. There were five panelists: Shutaro Koiwa (Miyagi Prefecture/Tateito Yokoitto LLC), Taizo Kobayashi (Shimane Prefecture/Kobayashi Kobo), Junpei Yamada (Aichi Prefecture/Yamada Junpei x Nekkyo Dagaku), Yoshitaka Kinoshita (Chiba Prefecture/Narita Taiko Festival), and Asumi Nishida (Chiba Prefecture/College Taiko Association), with Yui Kamiya (WTC coordinator) as the facilitator.

The taiko and *sousaku-taiko*, which have spread worldwide today, tend to focus on the taiko itself. However, it has not necessarily been the key focus in local communities in Japan; rather, it has been perceived as part of the community’s folk art. This session expounded the chronological change in the relationship between local communities and taiko through discussions based on the panelists’ activities.

For the benefit of the overseas audience, the session started with reviewing the role of folk art in local Japanese communities. Koiwa, who communicates about folk art and the local culture between Tokyo and Tohoku, stated that folk art in local Japanese communities has also fulfilled the function of “prayer” for the locals. People danced and played taiko as “divine rituals” to pray for good harvest, health, and peace. During these occasions, the primary draw was the act or song while taiko served as the “accompaniment.”

However, at present, folk art is losing its ritualistic characteristic, and preservation of folk arts in communities is becoming difficult. Therefore, we must pay greater attention to the fact that despite all these difficulties, many local communities across Japan are trying to preserve their local folk art and bequeath it to the next generation because they consider folk art the pride of their community. How is local folk art preserved today? The other four panelists introduced their pursuits, suggesting how taiko and folk art are practiced in contemporary society.

Iwami Kagura from Shimane Prefecture, a folk art in which Kobayashi is involved, is practiced by about 130 groups across a wide range of age groups, from 3- year old children to octogenarians (people in their 80s); this makes Iwami Kagura remarkable. According to Kobayashi, the reason Iwami Kagura has so many participants is that people come to see folk art, as they consider it “cool,” and because they grew up seeing older students and adults performing it. An environment in which people can be in touch with the “life” of the people who practice folk art daily, can certainly help in preserving and passing on the tradition.

Yamada, who is involved with *sousaku-daiko* in Nishio City, Aichi Prefecture, has been producing a variety of taiko events. Especially well-known is “Nishio Sen’ nin Taiko,” in which a thousand taiko players congregate in one place to perform together. To ensure continuity of his activity, Yamada does not hold events for free, and he emphasizes improving quality. As it is difficult to rely on support from the government, business groups, as well as volunteers, it is important to have a strategy to draw interest through participants’ efforts, and to maintain connection between the local community and taiko. These activities, which began in 2014 in Nishio City, have already become an opportunity where residents of all generations can experience taiko, indicating that the event may take deep roots in the community.

The “Narita Taiko Festival,” in which Kinoshita is involved, has a strong link with community building. Narita has a well-known temple, Naritasan Shinshoji, at its center that has maintained a strong relationship with taiko. Thus, more than 60 taiko groups participate every year in the Narita Taiko Festival, and it was mainly initiated by shop owners on the way to Naritasan for the purpose of introducing folk art. Throughout history, the festival stands out for the proximity between the community and its participants. The local residents and students handle lighting and sound management, and the Narita Taiko Festival has become a “magnet” where participants from inside and outside the community, attracted by the residents’ grassroots activity, socialize and meet with one another.

Nishida is involved in the College Taiko Association, a community that encourages activities of the next generation. It is an important place where workshops and information exchange happen between young taiko players, and where they can meet each other. There is no doubt that those who have met each other through the organization will spread throughout Japan to start new activities in other communities. Kamiya, the facilitator, concluded that to maintain the relationship between the community and taiko, it is important for taiko “to be cool, attractive, and beloved.” How can taiko, separated from the “divine rituals” of a community, be passed on to the next generation? The search for this answer will continue in each community.

Allow me to situate the above mentioned chronological change in folk art in an academic context. As Koiwa stated, performance, festivals, and taiko constituted “divine rituals” in a community, and they not only connected people to deities but also strengthened the community’s cohesion. However, social change, such as modernization and urbanization, has modified the local community’s nature and has gradually weakened the significance of conventional art and performance.

It is clear in this session that folk art has not been extinguished. In the contemporary period, new values have been attached to folk art and taiko, and these activities are expanding under a different type of logic than that of “divine rituals.” For example, in the other sessions of the WTC, it was pointed out that increasingly more people outside Japan are now playing taiko as a way of keeping fit and of getting to know Japanese culture. Moreover, as seen in Narita, taiko can be highlighted as a means of community building and, as seen in Nishio City, taiko can contribute to establishing connections across generations. Furthermore, as seen in the Kodo Taiko Performing Arts Ensemble based on Sado Island, Niigata Prefecture, taiko can be pursued to its limitless artistic expression.

Today, “playing taiko” is done for a variety of reasons depending on the individual or group. Taiko players are no longer limited to the community; those outside the community can also come and participate. This situation in which people from inside and outside the community—including taiko players, their supporters, those who plan and prepare events and stages, audience, and tourists—socialize with each other while having different purposes though taiko may be referred to as a “taiko community” that has maximum flexibility and elasticity like an amoeba.

In sociology, which I specialize in, these connections are termed as “chosen connections” (*sentakuen*) (Ueno 1987). This refers to situations where people generate new connections without being bound by conventional links such as the community, family, and occupation, but by making “choices” based on one’s hobby, lifestyle, and values.

From this perspective, both taiko and folk art can be perceived as “chosen connections,” that is, folk art as “divine rituals” for making connections with deities and maintaining the local community, as well as folk art where people connect with one another and create local networks while being true to their own values. Folk art and the taiko of contemporary Japan support the local community through this new route.

However, the problem concerning inheritance remains. As the taiko culture is supported by people’s choices, there may emerge pressure “to keep being chosen/to keep choosing.” How can a taiko community persist while ensuring that the practitioners enjoy themselves? What is sought here is a polyphonic* mechanism that surpasses the framework of narrowly defined “folk art,” through which, regardless of the community, generation, or gender, people with diverse goals can join the community with their diversity intact.

* Polyphony was originally a musical term for polyphonic music or a style of composition. However, in humanities and social sciences, it is used as a concept that indicates multiple voices and consciousnesses engaged in dialog without merging. This is based on the work by Mikhail Bakhtin, a Russian thinker.

Wadaiko as a Global Vernacular

Takehisa Kadota

The 2020 WTC, which was held online, is an extremely courageous attempt to recover relationships among people by drawing from taiko and arts to resist the increasing fragmentation of the world due to the spread of COVID-19. Given that taiko is a performing art in which performers and audiences resonate and share their emotions based on physical expression, the impact of WTC would likely have been bigger if it had been held as an in-person event and not online. Nonetheless, it gave hope to many people precisely because of the present circumstances, and it has also confirmed the taiko's value. I would like to describe taiko's value as "the capacity to live with as well as transcend the community."

I participated in several sessions. Here, I would like to explore, from the perspective of cultural anthropology/ethnology, the significance of the session on "The Value of Taiko for Community Building" (November 22, 2020), which focused on the relationship between taiko and communities. Panelists in this session were community members engaged in Iwami Kagura and the Narita Taiko Festival, as well as a student active in a university taiko organization. Comments, mainly in English, were shared by the overseas audience through the chat box. Presumably, they were impressed with what they saw and heard about the environment in Japan, where taiko is deeply rooted in everyday life and the community.

Often, we equate "locality" with "community," but they are not necessarily the same. When people gather and develop a structure, there is collectivity. We may refer to that as a community, of which locality is one type. A community that has manifested itself geographically is called a local community. As seen in the case of Iwami Kagura, taiko was originally transmitted as a form of local folk art in the local community. Transmission cannot be separated from everyday life in the community and taiko is woven into the annual cycle of work and a series of festivals and rituals. Transmission also means that it is handed down personally through generations. As festivals and rituals are inseparable from taiko, in areas where festivals and rituals remain active, taiko and folk art are also spirited. The local industry that supports people's lives must be well developed to facilitate active and lively festivals and rituals. For example, places like Sado Island, Niigata Prefecture, which has prospered owing to its gold and silver mines and trade, is also home to Kodo, the world-famous taiko performing arts ensemble, along with a rich culture and folk art, and remains buoyant, overall. Conversely if the main industry of such places declines, folk art will also face a crisis.

In the twentieth century, the local community across Japan could no longer sustain folk art because of urbanization and the shift to an industrial structure; as a result, folk art had to change to ensure its survival and transmission to the next generation. One of the ways is by designating it as a cultural property and preserving it through a preservation group. Another is for it to be incorporated in the school education system. In fact, at present, schools are the most powerful "transmission body" of folk art. Many elementary schools practice local folk art during the integrated learning period, and in junior high and high schools, local folk art is offered as part of extra-curricular club activities. Instead of teachers who have been posted to the school from a different place and do not have the local skills and knowledge, local people living near schools would be invited as instructors. Having gained an institutional foundation in education, "school folk art" (Kureya 2017) has now become a sector that cannot be overlooked when examining the reproduction of taiko and folk arts.

As stated by Asumi Nishida, one of the panelists, increasingly more people have grown to understand taiko through school folk art, and it is not rare that these people start a more serious taiko club at the university and participate in global taiko conferences. Moreover, it appears we find many people who have the experience of school folk art among instructors and students in general taiko groups and classes. Even some of those who go on to become professional taiko players have the experience of learning taiko at school. Therefore, we can state that learning folk art at school is the starting point for taiko, and it is essential to recruit more drummers.

As observed, the intergenerational continuation of taiko has shifted from transmission in the community to spread across various communities including schools, local groups, and clubs.

Transmission within a community is like a “secret technique” that is only open to local residents, but as taiko is spread beyond the locality, it is now practiced commonly by many people worldwide.

What actually attracted people in the talk session was not the de-localization/de-nationalization of taiko, but the fact that the taiko is deeply rooted in a particular area, such as Narita and Iwami. Even though taiko is now practiced globally, and the roots of the drumming technique and styles of taiko are found only in particular areas of Japan, the fact that they are inseparable from the region is extremely important. This is because people worldwide who are attracted to taiko and for those who have trained on a daily basis, taiko is not one of those “enjoyable musical instruments” with no nationality, nor is it a simple exercise. These people are committed to taiko with some distinctiveness, and many of them see taiko’s spirituality and history as being part of taiko.

In contemporary society, more and more information, services, products, values, and goods are denationalized. Many people would not bother to find out that Spotify is from Sweden and WhatsApp is from China, because the company that runs the platform on which we listen to music or exchange messages does not matter. As global capital is hegemonically covering the world, we see similar goods and services everywhere. By contrast, there are many things that are available only in a particular place in every region. What is endemic of a region, what is not hegemonically spreading but has been practiced as part of people’s lives in the local community is called “vernacular” (Baumann 2008). Taiko has been transmitted as something for everyday practice of ordinary people; it is unrelated to power and capital, thus making it a typical example of vernacular art.

As the world is polarized into the global and the vernacular, there are not that many things that are deeply rooted in a specific area and yet allow people from other areas to approach them. Taiko is rare in that although no specific global companies or promoting companies have pushed it forward in a hegemonic manner, it has spread worldwide, particularly in the US, during the second half of the twentieth century, and is now a global phenomenon (Konagaya 2001). Moreover, as discussed above, people are very concerned about its roots, and they are always informed of taiko’s origins. Based on this expectation, we can retrospect and articulate that the online session was an opportunity to share the genesis of taiko in a new way, by directly connecting local taiko players in Japan with global taiko players.

Taiko maintains characteristics that appear to contradict each other, that is, it is vernacular and at the same time global. Japanese food such as sushi and ramen, have also become global, but we enjoy the food itself and there is no problem if it is separated from its roots (we eat pasta regularly but we rarely think about its connection to Italy). Therefore, Japanese food is increasingly cut off from “Japan.” This process is essential for any cuisine to expand, and it is not necessarily a bad thing. However, taiko has not been separated from its vernacular aspect although it has become globalized. In other words, it maintains the capacity to transcend the community while also existing within the community. This is a rare value that attracts people.

This is not to argue that Japanese taiko performers should take a conservative stance and insist on “correct” taiko that has been transmitted within the community. Vernacular does not mean traditional or unchanging; it encompasses the practitioners’ creativity. For those practicing taiko in Japan, it is important to continue being challenged and to try new things, and it is expected of them to communicate this to the world using various techniques, including videos. This is because new initiatives undertaken by the Japanese, where taiko’s roots lie, will offer courage and the spirit of challenging oneself to those who try taiko in other parts of the world.

Potential of Taiko to Embody a “Shared” World

Kodai Konishi

What impressed me most while participating in various talk sessions at the WTC was, first, the significance, potential, and diversity of the social roles of taiko as well as the extremely positive and sincere attitude of people promoting the movement to mobilize taiko’s power.

Taiko’s potential is vast and diverse: some people focus on establishing connections and

building/maintaining community, while others focus on creativity such as “co-creation,” produced by the layering of individual sounds and the expression of each player’s “inner creativity.” Some focus on the creation of connecting nodes that transcend social attributes, such as age and sexual orientation, while others focus on inclusion such as approaching those who have been socially marginalized. Some focus on the accessibility of taiko (a percussion instrument and its rhythm), as it can easily overcome hurdles in music, such as tools (musical instruments, equipment), rules, and skills, whereas others focus on medical care with regard to mental illness, disabilities, and health maintenance. The talk sessions explored taiko’s vast potential for practice from multiple perspectives. When taiko is discussed in an educational context, it is often reduced to items in the curriculum that focus on knowledge and skills such as “understanding Japanese traditions” and “experiencing the local culture.” However, it was stimulating to listen to universalistic and cosmopolitan discussions during these sessions, specifically regarding how to realize the taiko’s latent potential, beyond the context of taiko being deeply rooted while respecting its rootedness.

Why do we pursue and emphasize this “potential”? It seems that there are several critical perspectives to various social phenomena, attributable to the permeation of globalization. There is no doubt that relationships, inclusion, and care are urgently required to respond to rapid social change—including a new division of labor and a new gap in society caused by market fundamentalism (often referred to as neoliberalism), isolation, and depopulation resulting from increased social mobility; the instability pertaining to recognition of individuals, increased marginalization, exclusion mechanisms due to homogenization, and the instability of economic systems caused by innovations such as information and communication technology. These phenomena have accelerated social mobility and uncertainty, robbed the existing (relatively) stable ties off the lives in this world, and have contributed to disintegrating society into the state of anomie, where atomized “individuals” are blown hither and thither like grains of sand. I suspect that such a sense of uncertainty is integral to this. When set against this social background, it is clear why various activities centered on taiko have been attracting attention, sometimes as a remedy and sometimes as a carrier of new social functions. In other words, precisely because we live in such a time, the conference’s “basso continuo” was the intent to focus on taiko (i.e., sounds, rhythm, and the way it stirs up emotions), which has been marginalized as a music form by a society that focuses on productivity and efficiency to restore the lost liveliness of society.

Furthermore, a recent shift in research into music (from object to event) is not unrelated to these movements; in fact, it is gradually increasing its influence. This is an attempt to shift from a static model in which music is heard as one dimension and interpreted as an “artwork” to a dynamic model in which music is considered a “practice,” a creative activity based on two-way communication through sound, or an activity to create emerging sound and physical expressions. Christopher Small refers to this theoretical shift as “musicking” and articulates its potential. He argues that music is not something that is to be accepted by an audience, rather as an inclusive practice that transcends the binary relationship of the performer and the audience to allow both to experience and become involved in the creative process (Small 2011). In this regard, highly accessible percussion instruments are considered superior at building an inclusive space and creating excellent effects as tools for engendering more direct and intuitive co-creative relationships, because we can produce any sound or rhythm using our body. Meanwhile, when considered in the context of “taiko,” what are the semantics and methodology that can be proposed? We still need more discussions that transcend the simple fact that taiko not only represents Japanese traditional culture, and that we need to explore the potential of it as a percussion instrument, and deepen taiko’s significance in the vernacular context in order to achieve two-way verbalization.

In the context of music education, attempts are also being made to pursue the possibility of communicating through sounds/rhythm. Various methodologies are being examined in music education to escape from the focus of appreciation as a lofty “art culture,” and musical instrument training as a means to generate dynamic “musical emotions” and communication. An experimental method is being developed to construct processes to casually produce rhythmic movements and to engender spontaneous and enriching experiences (sharing of emotions) that combine sociability and physicality, so as to introduce mechanisms by which sharing of emotions produces “flow” into sites of learning (Terazawa et al. 2013). This links to the educational practice of Peter Hewitt and Yeeman Mui, as introduced in Topic 2, and I hope it will be implemented more widely.

As mentioned above, during the WTC, I could perceive the latent diversity of taiko, including its

hidden efficacy, functions, the roles it can assume in society, and the passion of people who are repeatedly engaged in drawing out such potential in concrete practice. I felt that in contemporary society in which music consumption is increasingly individualized due to the development of media technologies and the deep penetration of subscription-based consumption, communication to explore a co-creative (not competitive) world through taiko has been expanding. Certainly, the conversations at the conference have potential to start new movements. According to Mia Nakamura, a sociologist of art, “sound, while found within the body, exists outside the body as well. In other words, music simultaneously exists both inside and outside the body, and it exists to produce a kind of ‘shared’ field (a field of shared subjectivity) that is neither individual nor public” (Nakamura 2013). I experienced deeply the diverse potential of taiko, which keeps demonstrating its power as an “event” and a practice/experience in a “shared” world.

Special Live Talk The Starting Point of Creation through Taiko, and Taiko as a Performing Art

Kiyoshi Sugimoto

At the special live talk in the last slot of the WTC, Eitetsu Hayashi, a pioneer in the field of *sousaku-taiko*, graced the event with his presence. The interviewer was Nobuyuki Nishimura, a founder of the WTC and its chief coordinator.

As Hayashi was commissioned to compose the WTC’s theme song, the live talk started off with how the piece was created and the difficulties he had faced while creating the melody. Hayashi disclosed that as the WTC had requested for a piece that anyone could play and flexibly adopt into any style of playing, composing the theme song required a lot of ingenuity. He then provided details on *hayashi* music in the song title “Eternal SONG: It is ‘HAYASHI.’” According to him, the major feature was the leaping rhythm that had been played in Japan since ancient times. It had spread to various parts of Japan while people developed their own local nuances.

Hayashi then described the various features of taiko rhythm practiced in places he had visited to train as a taiko player. Hayashi first learned taiko in Mikuni-minato, Fukui Prefecture, then *yatai-bayashi* in the Chichibu region of Saitama Prefecture, and finally taiko from Hachijo Island, Tokyo. All these versions of taiko contain a great deal of improvisation, and there was no set way of drumming. For example, in Mikuni, the players drum in the “three-beat” (*mitsu-uchi*) rhythm (“*tattaka, tattaka, tattaka*”) while improvising. Hayashi said he tried to learn the piece by joining the drummers, but it was very difficult since he could not grasp the song’s composition.

After describing various examples, Hayashi categorically stated that “for those who were not born in that place, learning local taiko is as difficult as learning a foreign language.” He further added, “Children born there speak the language without problem but if you come from elsewhere, you cannot speak it at all when you are prompted. Similarly, I could not follow the taiko’s rhythm.” Then how did he master taiko with its many “dialects”?

“I used a tape recorder. I recorded the taiko performances and played it in slow replay mode and noted everything on sheet music. Then, I analyzed how the sound was divided and studied the sound composition in the improvised parts so that I could understand. This was the method I used.” He had already described this in his writings, but it was emotional to hear him talk about it in his own words. The fact that *sousaku-taiko* would not have started without the present technology indicates that it is a significantly modern phenomenon.

Hayashi confessed that he was not thinking of exactly replicating the taiko of different regions on stage, having learned them using the tape recorder. He revealed that, “it was fortunate” that the group he was a member of at that time “made the decision to compose a new piece to perform on stage while borrowing styles from regional drumming.” When asked why, he said, because “I felt it was very rude, it was not something that was done—to try to replicate a particular community’s performing art since I was not born there; I was born somewhere else, although we share the same Japanese culture.”

As he continued with taiko, problems with tradition emerged. For example, Hayashi and others produced a piece with a story and a climax based on the *yatai-bayashi* of Chichibu by increasing the number of taiko. The newly arranged piece for stage performance was misunderstood to be the

traditional form of the song, and it spread to the world as the taiko of Chichibu. This happened even though it was clearly different from the taiko that had long been handed down in that community. Due to these “accidents,” Hayashi increasingly felt that he had to compose new pieces. This is an important point that cannot be ignored by people engaged in *sousaku-taiko* in Japan.

Hayashi’s point can be clarified based on examples from the Japan Festivals, which are now held in many big cities worldwide. *Sousaku-taiko* is now an indispensable performance at any Japan Festival. Even if the festival organizer does not introduce *sousaku-taiko* as an example of Japanese tradition, it may well be the case that the local audience understands it as something traditional. This is the same as the case of the group dance in *Yosakoi Soran Bushi*, which is now performed at Japan Festivals across Asia. Taiko and dance are expressed as extremely contemporary, synchronistic, and a complex culture, although drawing from tradition for its essence.

At the end of his talk, Hayashi warned that taiko players must comprehend that there are two kinds of taiko in Japan: a traditional form of taiko transmitted in the community and a creative strand that attempts new performing expressions. It seems to me this type of understanding would widen prospects to lead taiko to even freer places as a new expression of stage art, as Hayashi has done. Here, constant self-awareness as a creator seems to be important, even before classifying oneself into the traditionalist or creative category.

What quality is needed for a taiko player to create something new? In his answer to Nishimura’s question, the first thing Hayashi identified was learning the diverse genres of folk art and performing arts. During the 1970s, Hayashi learned *kagura* (Shinto music and dance) and *onikenbai*, in addition to training in the three regions mentioned above. Moreover, he learned the so-called “pure Japanese music” in the form of Japanese dancing, *naga-uta* and *shamisen*; he also learned the flute and percussion of the Kabuki theater, *odaiko*, *tsugaru shamisen*, as well as classical ballet. These were and still are rare experiences, and Hayashi said that they made him realize that there was no new creation in the taiko field. For example, in Japanese dancing, people perform classical dance, but they always present a newly created dance as well. Following these experiences, Hayashi thought of doing something new with taiko, but he also stated, “I did not start out with confidence.”

The second thing is to learn about other genres of performing arts by carefully observing both stage and audience reactions. If you encounter an enjoyable musical, you should first think about how to express it with taiko. By doing so, Hayashi came to realize that an important feature of taiko is that players can move freely on the stage, which prompted him to produce new pieces that make the most of this feature.

Third, incorporate in his taiko expression the idea that “if it is hidden, it is the flower,” in addition to what he had learned from a variety of genres. This well-known phrase is derived from Zeami, “the founder of *Noh*,” who lived 600 years ago and completed the form of *Noh*. It describes the essence of performing arts. It means that one must present something that no one has seen before—something the audience would be surprised and astonished by when performed on the stage. “When I am composing a new tune, I always want to create something that is not similar to anyone else’s work, something that no one is doing.” He added, “but it is very difficult to do what no one else is doing.” Hayashi immediately expanded on this by quoting the film director Akira Kurosawa: “It is almost impossible to create something out of nothing. This applies to me, too, and I select bits and pieces from what I have seen and experienced, thinking not everyone has yet seen this way of doing things, and put them together to produce a new piece of work.”

If I were to add a fourth point, it would be to maintain a positive attitude toward learning from a variety of genres, as seen in Hayashi’s background.

If I were to expand on Hayashi’s talk, as discussed above, I would say that the key to the future success of *sousaki-taiko* lies in whether players can develop new taiko expressions on stage with reference to each region’s tradition as well as cultures worldwide, both past and present. Furthermore, important here is the extent of impact the “novelty” would have on the audience. I sincerely hope many adventurers will appear in many parts of the world using Hayashi’s history as a compass. I also hope that I will have many more opportunities to enjoy such performances as an audience member.

Hayashi also discussed points related to this talk session in the premium talk, so please refer to that as well. There is a lot to learn: the concrete process of creating a taiko piece, establishment of solo performances, and background of the production of narrative stages, taiko’s potential, and conditions for professional taiko players.

2. The Questionnaire: Results and Analysis

Kiyoshi Sugimoto & Fumiko Kobayashi

An internet-based questionnaire was conducted for over three weeks starting from the WTC dates to December 15, 2020. A total of 54 responses were obtained, with 21 responses for the Japanese version and 33 responses for the English version. A comparison of the responses of these two versions shows some expatriates among the respondents of the Japanese version, but most of them were likely Japanese nationals. Similarly, all the respondents of the English version were likely foreign nationals.

1. Respondents' attributes and their relationship with taiko

Let us begin by examining respondents' attributes. As Tables 1 and 2 show, in terms of gender, there were 8 male and 12 female respondents for the Japanese version and 9 male and 24 female respondents for the English version. In both cases, the proportion of women was higher, with the tendency more pronounced among the foreign respondents. It is often pointed out that there are many female taiko players, and the questionnaire results also indicate this.

Table 1: Respondents' attributes: Japanese version Table 2: Respondents' attributes: English version

Gender		
Male	8	person(s)
Female	12	person(s)
Unknown	1	person(s)
Current country of residence		
Japan	14	person(s)
United States	3	person(s)
Australia	3	person(s)
Unknown	1	person(s)
Age		
Youngest	29	years old
Oldest	63	years old
Twenties	2	person(s)
Thirties	0	person(s)
Forties	5	person(s)
Fifties	6	person(s)
Sixties and above	5	person(s)
Unknown	3	person(s)
Average	43.7	years old

Gender		
Male	9	person(s)
Female	24	person(s)
Current country of residence		
United States	14	person(s)
Australia	5	person(s)
Canada	2	person(s)
Spain	4	person(s)
Hungary	3	person(s)
England	2	person(s)
Germany	1	person(s)
Italy	1	person(s)
Argentina	1	person(s)
Age		
Youngest	29	years old
Oldest	77	years old
Twenties	1	person(s)
Thirties	9	person(s)
Forties	15	person(s)
Fifties	2	person(s)
Sixties and above	2	person(s)
Unknown	1	person(s)
Average	41.2	years old

As for current country of residence, in descending order, 17 respondents lived in the United States (US); 15 in Japan; eight in Australia; four in Spain; two each in Canada and England; and one each in Germany, Italy, and Argentina. As six respondents of the Japanese version resided in the US and Australia, the number of Japanese residents who responded to the questionnaire was only 15. As we will elaborate further, it should be noted that it is often so that overseas participants are keen to take part in projects such as this.

The average respondent age in both the Japanese and English versions was early 40s. In the Japanese

version, the average age was 43.7 years with the majority being over 40 years and no respondent being in their 30s, which is concerning. By contrast, for the English version, the respondents were mostly in their 30s and 40s. Notably, the number of young participants in their 20's was low.

As for occupation, the proportion of respondents engaged in art and related industries was slightly higher for the English version. The proportion of respondents engaged in education was similar for both the Japanese and English versions. However, as the sample is small, it is not clear if this reflects the overall tendency among WTC participants.

Table 3: By occupation: Japanese version

Occupation	
Music/dance/events	4
Office workers/Civil servants	4
Childcare/education	4
Technicians	3
Self-employed	2
Housewives	2

Table 4: By occupation: English version

Occupation	
Music/dance/theater	8
Research/education/medicine	6
Technicians	8
Other (Office workers/civil servants)	5
Students	1
No response	4

Next, let us examine respondents' relationship with taiko. In terms of when they first encountered taiko, the proportion of overseas respondents who came to know about taiko in the 2000s and 2010s was high, and the period of playing taiko was 5–19 years for many. For some of the respondents, it appears that some time had passed between the first encounter with taiko and starting to play it. By contrast, for many of the Japanese respondents, the period of playing taiko varied between 10 and 20 or more years.

Table 5: Year of encounter with taiko and number of years playing taiko: Japanese version

When were you first introduced to taiko?	
1970s or earlier	1
1980s	2
1990s	4
2000s	3
Since 2010	4
Unknown	7
Experience in taiko drumming	
Between 1 and 4 years	3
Between 5 and 9 years	3
Between 10 and 19 years	8
20 years or more	6

Table 6: Year of encounter with taiko and number of years playing taiko: English version

When were you first introduced to taiko?	
The 1970s or earlier	1
The 1980s	1
The 1990s	6
The 2000s	10
Since 2010	10
Unknown	5
Experience in taiko drumming	
Between 1 and 4 years	1
Between 5 and 9 years	13
Between 10 and 19 years	15
20 years or more	3

Where did the respondents first encounter taiko? Tables 7 and 8 provide this information. The overseas respondents were first introduced to taiko through diverse routes but did not start learning taiko in Japan.

Table 7: Where the respondents started taiko and the venue: Japanese version

Where did you first start taiko?	
Tokyo	2
Saitama	1
Mie	1
Kumamoto	1
United States	5
Australia	2
Unknown	9
Venue	
Workshops/classes	3
Community events/festivals/conservation groups	4
Concerts/festivals	3
Unknown	11

Table 8: Where the respondents started taiko and the venue: English version

Where did you first start taiko?	
United States	8
Japan	6
Australia	5
Spain	2
Hungary	2
Canada	1
United Kingdom	1
Argentina	1
Unknown	7
Venue	
Festival/event/concert	14
University	4
Workshops/school/cultural center	3

A similar tendency was found regarding the place participants first started playing taiko, as shown below in Tables 9 and 10.

Table 9: Where did the participant start playing taiko: Japanese version

Where did you start playing taiko?	
Japan	15
Present country of residence	5
Unknown	1

Table 10: Where did the participant start playing taiko: English version

Where did you start playing taiko?	
Japan	6
Present country of residence	26
Others	1

The next question that was asked of respondents is why did they play taiko. The pull-down menu for the response consisted of the following options: 1) To become/keep fit, 2) To refresh myself (for pleasure), 3) To learn about Japanese culture, and 4) Other (please specify). For the Japanese version, 10 respondents chose item 2) and three chose 3). By contrast, for the English version, only two respondents chose 1) and six chose 3). For both versions, the rest of the respondents chose 4). It appears that the three options as reasons to take up the taiko were not sufficient for overseas respondents.

The reasons that were individually articulated included: “I was attracted by taiko’s powerful sound,” “I found something new in taiko at school,” “I was impressed by taiko’s energy when I saw a taiko performance,” “I wanted to play taiko myself, not just to listen to it,” “I wanted to understand the essence of taiko that connects me with everything,” “I enjoyed playing taiko,” “I was simply interested in wadaiko,” “I wanted to go to Japan,” “My friend invited me,” “I wanted to make friends,” “Interesting rhythm and movement,” “I do both dance and drumming, and taiko enables me to do both,” “Taiko spoke to my heart,” and “I was attracted by taiko’s artistic expression.”

For the Japanese version, the reasons included: “I enjoyed dancing to wadaiko music,” “To deal with the stress I was feeling after I quit theater, which I had been doing for a while,” “I wanted to learn about various types of music,” “I was only watching a wadaiko performance, but then I heard about Miyake-daiko with simply rhythm and movement,” “I simply wanted to try it out,” “To introduce my

disabled daughter and her friends to taiko, I needed to know more about taiko myself,” and “I was forced to join the taiko team for the local festival,” which was the only type of answer found in the Japanese version.

Tables 12 and 13 below show the type of group the respondents are associated with for practicing taiko and the number of hours per week they spend doing taiko. While the question was designed on the premise that people had diverse relationships with taiko, it was very difficult to classify the answers by type of group and activity. As a result, many overseas respondents ended up answering “Other,” as their practice takes a variety of forms. We found that overseas players spend more time practicing.

Table 12: Types of groups and time spent practicing: Japanese version

Form of practice group	
Taiko groups	11
Taiko classes	5
Groups involved in conserving local tradition	2
Other	2
Unknown	1
Time spent practicing (pre-pandemic, per week)	
Less than 1 hour	2
Between 1 and 2 hours	5
Between 3 and 4 hours	4
Between 5 and 6 hours	6
7 or more hours	3

Table 13: Types of groups and time spent practicing: English version

Form of practice group	
Performance group	14
Recreation classes	5
School club activity	1
Other	13
Time spent on practicing (pre-pandemic, per week)	
Less than 1 hour	1
Between 1 and 2 hours	5
Between 3 and 4 hours	9
Between 5 and 6 hours	8
7 or more hours	10

Tables 14 and 15 below show how groups (to which the respondents belong) interact with others, both domestically and internationally. For both Japan and other countries, the groups interact actively with others, but the overseas groups have more potential to perform outside their country.

Table 14: Interactions with other groups and participation in performance abroad: Japanese version

Interaction with other groups	
Yes	17
No	3
Unknown	1
Participation in performance abroad	
Yes	8
No	12

Table 15: Interactions with other groups and participation in performance abroad: English version

Interaction with other groups	
Yes	24
No	9
Unknown	
Participation in performance abroad	
Yes	20
No	13

2. World Taiko Conference

We asked respondents certain questions about the WTC. As Table 16 shows, for the Japanese version, many of the respondents heard about the event from friends and acquaintances. For the English version, as shown in Table 17, there were multiple answers, and it seems that the respondents had access to several information sources. Under “Other,” we found that several participants had cited their friends’ names and stated that announcements had been made at taiko gatherings, such as the European Taiko Conference, since about 2017.

Table 16: Information sources: Japanese version
No multiple answers

How did you learn about the WTC?	person(s)
Friends/acquaintances	13
Social media	7
WTC's web page	0
Other	1

Table 17: Information sources: English version
Multiple answers allowed

How did you learn about the WTC?	person(s)
Friends/acquaintances	13
Social media	17
WTC's web page	21
Other	12

Tables 18 to 21 show details of the number of videos the participants viewed and what they found interesting at this year's WTC.

Table 18: Number of programs respondents watched: Japanese version

Number of programs watched (out of 9)	person(s)
1 program	3
2 to 3 programs	2
4 to 5 programs	4
6 to 7 programs	5
8 programs	4
9 programs	2
Unknown	1
Average	5.2

Table 19: Number of programs respondents watched: English version

Number of programs watched (out of 9)	person(s)
1 program	1
2 to 3 programs	6
4 to 5 programs	5
6 to 7 programs	13
8 programs	7
9 programs	1
Average	5.8

Table 20: Most interesting programs: Japanese version

Most interesting programs	person(s)
Premium video	6
Topic 1	6
Topic 2	2
Topic 3- Local	1
Topic 3- Global	1
Participants' videos	2
Asakusa Taiko Festival	1
Special live talks	1
Unknown	1

Table 21: Most interesting programs: English version

Most interesting programs	person(s)
Premium video	10
Topic 1	5
Topic 2	5
Topic 3- Local	1
Topic 3- Global	1
Participants' videos	6
Special live talks	2
Taiko documentaries	2
Unknown	1

The respondents were asked to write suggested improvements and what they would like to see implemented. The major points are presented below. First, we summarize the points from the Japanese version, and then from the English version.

Japanese version (excerpts, including summaries)

To accommodate interpretation, longer sessions would be better.
I wanted to listen to more diverse views in Topic 3 – Global. In Topic 1, participants with diverse styles and character engaged in the discussion with mutual respect and interest. I look forward to seeing text-based material to learn about taiko’s roots and application in a systematic manner, as Mr. Yamabe proposed.
Perhaps, Google Meet with interpretation functions would be better than Zoom.
If I may, there were too many people for the allocated amount of time. As I was watching it from my computer, I wanted to hear more from each panelist.
The taiko seminar at the Tokyo branch was cancelled at such short notice. The cancellation itself was inevitable under a state of emergency due to the outbreak of COVID-19, but I wanted to be notified as soon as the decision was made. Live talk sessions were very satisfying, and I hope you will make good use of online platforms until the pandemic subsides.
I am planning to go through all the programs while they are available. Perhaps there are too many to enjoy.
Impressions: The participants in the taiko teams did not have any prior contact, and for amateurs like us, it was difficult to submit a video. In Australia, an application form (on Google Form) for volunteering and artwork submission are widely available during big events, which makes you think although it is a long shot, I should give it a try anyway. If the next one is held in Japan, I would like to participate as an English-language speaking volunteer to support general participants in the event.
The attendance was lower than expected. Please examine this. Perhaps more effort should be made to publicize the event.

From the English version (excerpts, including summaries)

As there was a lot of content, an overall suggested order to follow, depending on one’s interest, would have been useful.
Please continue to stream the next conference online. It would be good if we can keep in touch with taiko friends across the world after the WTC.
As it was held online, there should have been information on how we can connect to taiko friends across the world. The event description on Facebook was different from the reality. The description on the website needs to be simplified.
Before the live talk sessions, some of us spontaneously got together on Zoom, and this can be part of the WTC.
I wanted to know if the WTC was to be held much earlier.
As the content of the live talks was rich and it was difficult to concentrate, having breaks was a good idea. It may be a good idea to do some stretching together.
To encourage more wadaiko groups to participate, how about switching to a hosting site that can be introduced region by region?
The timing of the live talks was not very convenient due to time differences, so please allow for some break periods.
The help section on the website, specifically for those who are not used to live streaming and YouTube, was very useful.
I wanted to have a place to discuss the premium talk.
As each question and answer must be translated in the session, it is difficult to concentrate.
Please provide more content on local groups in Japan. I hope more Japanese groups will take part next time as the Japanese audience seems to enjoy the WTC.
If the live talk session had been divided into two parts and held in a three-hour slot, we could have deeper discussions.

A women-only session and a session on taiko artisans and cultural differences through the taiko would have been good. Moreover, it would have been nice to have a place like Zoom where any audience can drop in and talk.

I hope this event enables individuals who are isolated from the community, such as me, to come together.

3. Next World Taiko Conference

Lastly, Tables 22 and 23 show responses to questions about the next WTC in Japan, that is, after the pandemic subsides. We can see that both Japanese and overseas respondents want to participate in the next WTC. Regarding whom they want to attend with, the majority acknowledged their taiko friends. This suggests that people want to enjoy taiko with like-minded friends without concern. What is slightly surprising is that both Japanese and overseas respondents expressed their wish to learn about taiko in the local community, that is, taiko as a traditional folk art. This could be a uniquely Japanese offering that cannot be included at conferences across North America and Europe.

Table 22: Intent to participate in the next World Taiko Conference: Japanese version

Do you want to come to the WTC if it is held in Japan?	
Very much so	17
Probably	4
If so, with whom would you come?	
Taiko friends	18
Family	2
Other friends	1
If there is an opportunity linked to the WTC to contact with local taiko, would you be interested?	
Yes	21
No	0

Table 23: Intent to participate in the next World Taiko Conference: English version

Do you want to come to the WTC if it is held in Japan?	
Very much so	30
Probably	4
If so, with whom would you come?	
Taiko friends	31
Family	1
Other friends	1
If there is an opportunity linked to the WTC to contact with local taiko, would you be interested?	
Yes	32
No	1

3. Overall summary

Kiyoshi Sugimoto

The major achievements of the WTC can be summarized as follows.

- 1) I appreciate the fact that the organizers explored every possibility to hold the conference until the very last moment before cancelling it, coinciding with the introduction of various restrictions due to the spread of COVID-19. Although things were uncertain until the last moment, under these circumstances, it was effective to switch to an online conference centering on videos and web pages.
- 2) The “Taiko Community Video Forum” and the call for video/song submission allowed the participants to learn through video how taiko is played worldwide and the taiko activities taking place, in addition to the type of performance that is provided. The submitted videos were diverse and some of them piqued our curiosity. As a reference, the submissions and countries of origin are as follows: Taiko Community Video Forum—84 submissions (38 were from the Taikothon event held by the Taiko Community Alliance); number of songs submitted—25 as well as general submissions: a total of 109 submissions. Submissions were from a total of 16 countries and regions: Japan, the US, Argentina, the UK (England, Wales, Northern Ireland, and Scotland), Italy, Indonesia, Australia, Spain, Germany, New Zealand, Hungary, Brazil, and Belgium (the submitted videos are archived on YouTube to be used a future resource).
- 3) The submitted videos are a collection of first-hand accounts regarding the development of the taiko culture worldwide, as narrated by actors who have been involved. As such, these descriptions enabled us to comprehend clearly how taiko has developed over the years. They make us feel that while it looks disparate, various forms of taiko have been developing with some connection with one another. In any case, many videos were prepared and each of them is of a quality that ought to be preserved as a record. The two documentary films on taiko have also deepened our understanding. “Big Drum: Taiko in America,” with subtitles in Japanese by the organizers, is a collection of testimonies about the development of taiko in the Japanese American community, and I hope that it will gain more Japanese viewers. The videos that were collected this time provide handy material to learn about the development of contemporary wadaiko.
- 4) Finally, I would like to point out that the event was driven by the strong motivation of the organizers who wanted to communicate the great aspects of taiko. We sensed the pint of frustration that the taiko’s value was not being fully communicated; however, such a proactive attitude gives good hope for the future.

The following are three challenges for the future that became apparent when compiling this report:

- 1) As the WTC was held online, there was no definitive count of participants, which makes it difficult to evaluate. According to YouTube channel analytics, as of December 6, 2020, the total number of channel subscribers was 475 and the total number of views was 25,507. As of January 25, 2021, the figures rose to 510 and 33,372, respectively. It is expected that these figures will continue to grow steadily. Among the most viewed programs, as of December 6, 2020, at the top was the opening session and the subsequent live talk session on Topic 3: The Global with 2,236 views, followed by Topic 1 with 1,408 views, and Topic 3 (The Local) with 1,218 views. As of January 25, 2010, the figures were 2,350, 1,500, and 1,277 views, respectively, which did not show any significant increase. Remarkably, access to the WTC theme song and the submitted song has been steadily growing. This is probably because these songs are used for taiko practice. As elaborated further below, we probably need some ways of promoting the use of this content. Given that the major traffic sources for the videos are Facebook and the WTC website, each accounting for about 30% of all views, updating those can ensure continued increases in the number of viewers.
- 2) Related to the above, the demographic of the participants seems that the conference attracted

people who already knew each other through taiko. This was made clear in the live chat during the live talk sessions. As commented in the questionnaire, perhaps we should have had a chat or discussion system where online participants easily interact during the events. Missing this was perhaps inevitable as this was the first online conference, but my perception is that the WTC organizers' connection was strong. As stated in the WTC flyer, "Let's create more taiko friends across the world using this event as a stepping stone."

- 3) As for the valuable videos that were collected: Can we work on them further and archive them for the benefit of taiko enthusiasts? To start with, we can re-edit them along three or four themes. Some of the talks should be transcribed. I hope this will be carried out to increase the use of the video resources in the future.

I have identified a few challenges, but there is no doubt that this memorable first conference in Japan was a major step forward. Taiko's potential was fully demonstrated through videos. The *kushichouga*, "don doko", is now a universal language between all taiko players worldwide. As the questionnaire results show, almost all Japanese and overseas respondents are looking forward to the next conference, and most of them want to have an excursion to a different region to learn about the local taiko practices. What is best about taiko is playing it together with others. I hope this will be realized.

【List of References】

- Ueno, Chizuko 1987 'Connections that can be chosen/that cannot be chosen', in Kurita Ysunori (ed.) *Tradition and Change in Contemporary Japan 2: The Japanese View of People*, Domesu-shuppan, 226–243
- Kureya, Junko 2017 *The Ethnography of 'School Folk Art': Yaeyama Folk Art in Creation*, Shinwasha
- Small, Christopher 2011 *Musicking: Music Is 'Action'*, (trans. Nozawa, Toyokazu et al.), Suiseisha.
- Terazawa, Yoko et al. 2013 'The music emotion communication model by integrating bodily functions' *Cognitive Studies*, 20(1), pp. 112–129
- Nakamura, Mia 2013 *To Open Up Music: Trilogy of Art, Care and Culture*, Suiseisha.
- Nawa, Katsuro 2020 'Boundaries, movement, rhythm: Various aspects of "taiko drumming" in Byans and surrounding areas', in Nishii, Ryoko and Yanai, Tadashi (eds) *Affectus: Touching the Outside of Life*, University of Kyoto Press, pp. 243–274
- Bauman, Richard 2008 'The philology of the vernacular', *Journal of Folklore Research*, 45(1): 29–36.
- Konagaya, Hideyo 2001 'The Christmas cake: A Japanese tradition of American prosperity', *Journal of Popular Culture*, 34(4): 121–136.